

主 幹 麻 生 路 郎

川柳新誌

五 月 號



大正十三年三月三日（第三回）發行（每月一回）（便所可）
昭和三年五月一日發行（每月一回）（便所可）

川柳雜誌

第五卷 第五號

川柳雜誌社發行

▼ 川柳六厘坊忌

日時 五月五日午後七時

場所 南區日本橋一丁目交又點北の辻東入 日本橋俱樂部

兼題 「女車掌」三句

會費 三十錢

初心者の來會を大いに歡迎す

▼ 本社觀山吟行

日時 五月六日午前九時京阪天満橋出發

行程 比叡山、坂本、日吉神社、三井寺、疏水

會費 實費(食事持參)

歸途同日午後七時より京都圓山公園「あけぼの」で開催される京都支部創立句會に參會の豫定(會費三十錢、兼題「仲居」三句)

各地支部増設

本社に川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を増設いたします。柳界のため且又「川柳雜誌」のために眞面目に支部幹事を引受け、極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやうといふ川柳家は、本社宣傳部へ支部設置希望の旨申込まれたし

川柳雜誌 第五卷第五號 目次

感想・研究・其他

時代川柳大觀異見 西原柳雨

「時代川柳大觀」で就 森東魚

川柳の本質(五) 田中辰二

金澤川柳大會に臨む 橋本二柳子

加古川の春 庄萬よし

一年前 省・ます女

車中より 安井ひろし

夜の二人(寫眞) 麻生路郎

川柳人の一生(三) 路郎評 柴舟畫

漫畫 路郎評 柴舟畫

古句質疑 蛭子省二

月評 路郎、紋太、春三

募集句 山雨樓、松郎

嘯藏 村田周魚選

釣鐘 喜田飯山選

本社四月例会 橋本二柳子共選

各地柳壇 安井ひろし記

(表紙) 安井ひろし

編輯後記 森田ひさし

小出樽重

革生

創作

北陸に來て 麻生路郎

川柳塔 矢田右大臣

太田朝陽 横田眠聲

松盛琴路 高見柳骨

岩崎柳人 庄萬よし

酒井駒人 川合舟々

三好革郎 橋本二柳子

岩本素人

松丘町二 中野柳陽

安西杏三 水谷鮎美

島田翠峰 中澤濁水

猪野燕柳 朝田新水

石川双葉子 中見光路

桑原京郎 兼重白鷗

水田黃彩

粒々集

啄崎松郎 長崎柳秀

佐々木三福 蛭子省二

近作柳樽 諸家

北陸に來て

麻生路郎

聖興寺の碑 (松任)

口説かれて千代女は一句詠んで逃げ

兼六公園の櫻 (金澤)

腕前を疑ふ寫眞櫻咲く

寐ころべばわれを飛白にしたりけり

家族温泉 (山中)

湯もにぎり話もにぐる山中や

よしのや旅館

しゝもうたすによしのやの晝
山にくや女にくやの晝深し



こんな尻にあると思わぬ人名簿
 階級の前に主張も哀れなり
 馬鹿野郎言はれるまでは惚れて居た
 人間の弱さを彼れも云ふて居た
 神様のお力父は恐れ入り
 雨もまたやつぱり俺に似て孤獨
 金時計ふき首筋へ寒ふなり
 人間のよさは調子に乗り過ぎる
 何さ今いはれやうがの肚の底
 抜けた齒にわが凋落の年を知る
 華商燦然として佛間のやうに見ね
 母性愛霜に引摺る豚の腹
 春着の子たべたお腹をさすられる
 生きて居る事が厭やではないのなり
 残つて居る鳥を失意嬉しう見
 片親の丁稚なか／＼負けてるす
 むつかしいものさ話それつきり
 ねこらんでも南畵の家が面白し
 女中ふさ襖を荒く開けんとし
 俺の身へせまつて来るはパンのみか
 まだ生きてやりたい俵ばかりなり
 四十に近く中将湯せんじ
 三味線に先の威厳は無かりけり
 尺八は咽喉につまつた氣味があり
 本箱も机も在りし時のまゝ
 薬風呂一人上れば皆上り

大 同 同 鳥 同 同 大 同 同 鳥 同 同 大 同 同 大 同 同 螢 同 同 同 大 同 同 同
 阪 取 阪 根 阪 連 池 阪

蛙 同 同 聴 同 同 露 同 同 縁 同 同 秋 同 同 北 同 同 寂 同 同 同 冷 同 同 同

之
 聲 松 斗 助 風 仙 郎 笑



佛事だ云ふに猥談はすむなり
眞劍に口説くに芝居じみて來る
忘れた頃に子が眞似をする
俺には一生三輪車がはなれまい
金も金だが禿をかくしたい
結局は金で買はれてゐる如し
心配をさすなと叱り涕をかみ
手袋の指が覗くは梅の頃
本社では頭の低い人ばかり
ある時は酒が味方になつて呉れ
もうそんな話するなとちよこをさし
春の宵聲する方に友がゐる
河岸の灯をみつめて淡き戀やある
京の街牛の歩みの尙おそし
惚れてゐるだけに恨むも無理がない
欺されてみるのもいゝと惱む也
いろ／＼な菓子貯えて長く病み
夕焼へ牛は一と聲鳴いた丈け
死んだのを思ふ日もあり薄化粧
月給の上らぬ先きに子が生れ
仲人よ彼の女でなくば去んでくれ
お殿様戀はお金で買へませぬ
背ミ背合はして丁稚暖をこり
親子連チツブのいらぬこを撰り
分別は會社勤めがしたくなり
美術部で金を拂ろてゐる人を見た

同同布同同松同同神同同島同同大同同島同同大同同豐同同

施 江 戶 根 阪 根 阪 中

同同有同同無同同重同同花同同其同同政同同聞同同石同同

陀 砲 子 情 象 司 路 竹



有頂天になれる男のたのもしさ
 二十過ぎし姉のさみしき分る年
 關東煮たべさせ情かけてやり
 世の中がいやになる程儲からず
 安心をしろと百圓札を出し
 馬車馬の厩へ入る嬉しかり
 扱て聞けば親孝行はむつかしい
 憂鬱に暮すが親に孝みなり
 朝風呂がもう沸いてゐる煙を見る
 思ひ出は東京に咲く櫻草
 俄雨下水の芥が待つてゐた
 船パンに埃がかゝる春の風
 外人の派手は不自然さも見へず
 女子選手ヒステリックな顔で駆け
 マントウをわすれて歸る春の客
 寫眞帖青葉の頃を思ひ出し
 妹が立つミビーズがちとこぼれ
 男の子客が泊つて父と寝る
 良妻さいふのをもつて物足らず
 唇へヒョッコリ嘘が飛んで出た
 段梯子慣つた音で降りて来る
 どう見てもブル階級の姿です
 資本家になれば資本家の心
 ブラジルへ陸をはなれた淡い影
 盛り場を週番司令高う行き

大 同 神 同 大 同 岩 同 大 同 安 同 大 同 大 同 香 同 大 同 同 鞍 同 同 神
 阪 戸 阪 屋 阪 東 阪 阪 里 阪 山 戸

百 同 春 同 梢 同 笑 同 伴 同 花 同 豚 同 毒 同 武 同 盧 同 同 草 同 同 竹
 公 二
 雷 子 雨 人 内 蝶 郎 仙 子 白 明 木



代書人畫はうぎんで濟ましき
 瞑想へたゞひもじさが込み上ける
 いっそもう惡人で行く四十過ぎ
 戀人に逢はんが爲に立つてゐる
 商賣の敵同志が風呂で會ひ
 剃刀を一番怖い首にあて
 持てなして呉れる酒にも親しめず
 志願者が續々来るいゝ天氣
 いゝ點も貰へず一年過ぎました
 小荷物が壊はれる筈と思ふ音
 到る處に青葉あり電車あり
 カレンダーを一度にめくる旅戻り
 嫁ぐ日の二度目の風呂へ灯が點り
 志士の墓異國の雪を浴びて立ち
 氣高くも色紙に残る佳人の名
 戀人と同じ様にコーヒ減り
 吸殻の様に第二の戀を捨て
 同情を強ひる涙さうけみられ
 勉強の邪魔さ鍛冶屋へ云へもせず
 邪道にはいつそ強さの力あり
 助かつた知らせも母を泣かすのか
 寒雀青竹に來て景になり
 モダンガール振り返へられる影淋し
 住む家のないのを知らず背に眠る

徳島未曾有大火(二句)

徳島	同	大阪	同	盛ヶ池	同	池田	同	大阪	同	長春	同	大阪	同	西宮	同	大阪	同	神戸	同	大阪	同	島根	同
休歩	同	三五樓	同	光哉	同	白蝶	同	愚陀	同	はこ八	同	白帆	同	九牛	同	よし江	同	幻柳	同	賀名芽	同	雷相	同



早や妥協して繩飛の端をさり
 良い方に理屈をつけて得心し
 人間が死んだと言ふに飲んで居る
 向ふ河岸三昧が聞えて雨になり
 なまなかな理性が邪魔をしてしまる
 大切なもので机の右にあり
 新婚の大きな音の金だらひ
 大地は人間を自殺させようとしてる
 世の中の莫迦も一人に數ふべし
 外交は飼犬に媚び下女に媚び
 旅日記廓情緒も書いてあり
 今のこの生活沙漠行くがやう
 先生が商品券を金にかへ
 一樣に子等叱られて夜になり
 月給で暮した母の苦勞性
 代筆になれて此頃世帯じみ
 涙なら互の胸に通じ合ひ
 ふくよかな腕時計をきうこしめ
 用もなく氣の毒さうに先に寝る
 鏡臺へ座つてみた女の子
 あつさりミ投げ出されたで覗き込み
 苦しみの峯でほんとの手を合せ
 子が出来て人間並の慾がつき
 四十過ぎ朝の電車を謠曲本
 看護婦を續けるやうに生れつき

同京都 同大阪 同神戸 同大坂 同鳥取 同大坂 同長春 同大坂 同京城 同大阪 同大坂 同和歌山 同大阪 同大坂

七

同妖子 同桃子 同蒼梧 同鎌月 同歌三 同一風 同籬楓 同菱明 同欣女 同風坊 同泰平 同柳哉 同曼平



退院を送り淋しい影を見る
 カレンダー早やおさついのまゝにあり
 妾宅をしばし本妻見て通り
 行末を考へてれば足がひへ
 妾もう嘘もつかない仲になり
 だまされてゐるのへ其手紙着き
 給料は安し雲が降つてゐる
 訛まれば訛まつたこて氣に入らず
 薄情な奴さ昔の手紙を見
 何日さなしに世間で俺を悪く言ひ
 親切の不徹底さを恨られる
 命には變へられないと金を出し
 女教員足らぬがまゝの鍋のめし
 同郷さ知つて訛りを丸でだし
 煙草店年寄りもゐて賣れぬなり
 紀元節
 新聞を取りに起きれば今日の雪
 氣を抜いたやうにボカンとさす巧さ
 美しい視線を恐いものにす
 夕立で相々傘の多いこと
 折檻が身にこたへてか地味になり
 言張つた理屈に膝がちさのめり
 寢言など云へれば寧ろ幸福だ

蟹ヶ池 同 大 同 鳴 同 大 同 大 同 鳥 大 同 富 大 大 大 大 山 大
 阪 阪 阪 尾 和 阪 田 取 阪 林 阪 阪 阪 阪 梨 阪

邦 同 赤 同 鳴 同 さ 同 幸 同 穂 幸 三 一 榮 翠 珍 粹 島 柳 一 惡
 郎 城 玉 舟 糸 子 泉 次 舟 作 川 郎 狂 村 狂 笑 太



月評 (前號)

路郎 紋太 松郎

山雨樓 春三

近作柳樽 紋太提出

スパークを神の怒の如く見る

蒼梧樓

紋太……此句の出来た動機は非常によいと思ふが、普通の文章のやうにだら／＼と言つたので妙味が無い、想に於て成功し叙法に於て失敗してゐると思ふ。同じ散文的に言つたのも次の句の「宴會にハッキリいひなやつさ知り」の方が或點まで成功してゐる、此のスパークの句は材料から云つて、もつと緊張した氣持が出なければならぬ、又出せるものと思ふ。

山雨樓……此句に今一つ、共鳴出來ないのはスパークに對し神の怒りさといふ表現がびつたり來ないからである。此のスパークを電車 of スパークと概念的に感じる人が多いだらうが、スパークは火花である、然しその火花

が何から發したかは分らない、鍛冶屋が鐵を打つ時に發するスパークか、雷の電のスパークか電車のスパークかそれがハッキリしない、私はかつて「スパークの青さお前は薄情」さいい句を近作柳樽で選句されたことがあつた、私は青さで電車のスパークを表現し得てゐると思ふ。油情さといふ表現も自分としては何人にも首肯して頂けると思ふ、然し此の句のやうにスパークだけでは何のスパークが分らない。作者の意思は分らないが、此のスパークを鍛冶屋が灼熱した、鐵を打つ時に發する赤い火花ならば、神の怒りさといふ氣持は感じ得られないでもない、然し私には下五がうなづき得ない、此點が此句の欠點であると思ふ。

春三……山雨樓氏の説は反對に、私は電車のスパークだと思ふ。其スパークを見た瞬間それを神が怒つたと思つた、さいい氣持を表現

したそれだけの句で「神の怒り」と誇張（ミ云へないかも知れぬが）された爲めに、も一つびつたり來ないと思ふ。又紋太氏の言はれる如く表現に難があるとは思はない、すら／＼さ氣持よく一度は良い句だと思はすところがある。然し句としては「宴會」の句の方が内容がある。

山雨樓……電車のスパークを見る時は、あの如何にも青い火花は怒りさ云ふよりも怨みを述べ憤懣の炎を燃やしてゐるさといふやうに感じられる。怒りさ云へば眞つ赤な鍛冶屋の鐵から發する火花の方が受取り易い、電車のスパークを取るさ、も一つびつたり來ない紋太……僕の様な俗人には、スパークさ云へば普通に電車のこゝを思ひ付くが……それとして「神の怒りの如く」蒼梧樓氏が見られた事に對して少しも干渉したくない。然し「神の怒り」と見るやうに神秘なそして莊嚴な氣持を感じた時には、今少しくさういつた莊嚴な叙法がありさうなものである。私の言ひたいのは、下五の生溫さが此句をスツカリ力の無いものにしたと云ふ點である。

春三……「神の怒り」と云ふのはスパークの青ささか、赤ささか云ふ色彩の感じてなく、スパークそのものを見た瞬間に作者がそれを神の怒りと感じたのだと思ふ。私はこの意味から云つて作者の主觀を尊重したい。又山雨樓氏は青い色を見て怨みを述べた、あるやうに感じるに云はれたが、私は響るスツキリした感じがすると思ふ、只「神の怒り」が誇張めいた氣がして此句をそんなに良い句だと思

思へないだけである。又紋太氏は下五の「如く見る」が生温いと言はれたが、私はそんなに弱いとは思はない、寧ろ強い様に感じ、これに落着いてゐると思ふ。

路郎……僕は此句を讀んだ時に、作者は表面強く見ゆるが、實際は氣の弱い正直な人だと思はせられた。先刻から「見る」といふ「る止め」の敘法が非難されてゐるが、さうした作者の弱々しい性格が「る止め」で表現されたといふことは當を得た叙法だと思ふ。此の作者が氣の弱い人であるといふ事は「紙屑を家まで運ぶ氣の弱さ」の句に又正直な人であるといふことは「宴會にハツキリいやなやつさ知り」「マツさして思ひなほした薄笑い」の句などを見るさうなけつるだらうと思ふ。只「神の怒り」といふ強い言葉の次に「る止め」の形式をとつてゐる爲めに、多少誇張された様な感じがするところから、非難が出たものと思ふ。

山雨樓提出

不治だとして念佛だけは缺かす

まい

秋風

山雨樓……總体此句の様な何だか、自分の心持を咏嘆したやうな句調そのものが、抒情風の作風に川柳の行き方として、生温い缺點があるに拘はならず、何か引きつけられる點があることを考へて見たい爲に、此句をまつたのである。こゝういつた感じは我々が常に感じてゐるところである（此時松郎氏出席、此句の如く瞑想的に人生問題を考へたり、或は社

會相を眺めた氣持は、社會評論的だとか、人生問題の研究だとか、或は思想問題の批判とかいつた、固い詩とは縁がない様な境地であるが、然しその心境を深く突き進めて行くところに新しい自己批判、人生批判と云つた一つの思想上の問題が起つて来て、それを止むに止まれぬ欲求から、短詩型を以て表現して自分の心持を統一し、或は淨化して行くといつた行き方は「川柳」によつて自己の生活を豊かにしてゆく、真い行き方だと思ふ。珍しい、突飛な、又滑稽な出来事や社會相の發見ばかりが川柳の凡てではないと思ふ。故に咏嘆的な感じを句によつて精練する云ふ事も、句で練磨する事も、我々の心の生活を豊かにする上に於て極めて尊い事と思ふ。此の句の批評は他の方にお願ひするとして、此句を採つた私の氣持を申し上げれば、以上である。

紋太……僕は以前から、こゝういふ句体に出合ふ度にいつもその句と句主とに對して、只尊敬の念を拂つてゐるばかりである。つまり他の批評を絶した心持だと思ふからである。夫も用語の間違ひさか、矛盾さかを發見した場合には、それを注意はするが、此句の様にまづ普通に纏つてゐる場合には、餘り多くな言ひたくない。此句から受ける感じは、何さなく遺瀨ない心持に引入られ、その句主が懐しい様な氣がする、然し僕がこの様な句を賞めたからこゝういつて、達者な作家が實際の感激もないのにこゝういふ句体でさういつた心持を押賣りされた場合には、私は今いつた氣持

で受取りはするが、私が受取るからと云つてさういつた句を連發されることは、作家の真心に訴へたいと思ふ。

路郎……非常にしつくりした、靜かな真い境地を持つた作家であると思ふ。これくらい作家の境地を正直に押し出して、作品そのものを壁のやうな句と爲したことは、私の常にいふ「實感に即した句を吐け」といふ事を最もよりよき体験で實行された人である。紋太氏が言はれたやうに達者な作家が、こゝうした境地をさうした態度で咏ひといふ事は「聲色」に過ぎないものであつても、私達には本當の響きは與へないものであると思ふ。茲に於て聲色の作品は永久に作家としての生命を失ふものであるといふことが斷言出来る。諦めても、諦らめても諦らめきれない淋しい境地を咏んだ、此の作者の句を掲げて作者に親し味を深くしたい、その句といふのは「帶解かぬ母の姿のいた／＼し」「振切つて出れば待つた様に雪」

春三……此句に生活味があるといふ事は同感である。何として理屈に走り易い、私達の句に真い手本であるといふ事は認める。が然し作者の生活には言ひ分があるのだから、僕も此句を提出しようと思つた。此頃の人達の句は生活に即した句が多くなつたが、生活そのものにも少し研究すべきものがあるやうに思ふ。此句では作者があまりに弱く、センチメンタルである。もつと眞鋭に、本當の人間らしく、藻掻き苦しんでゐるものを表はして貰

ひたい、此句はあまりに超然とし過ぎてゐる神様の様で我々とは縁が、遠いやうな所がある。結局此句は作者の弱々しい心を満足したに過ぎない、不治の病人かと思ふ時には「念佛だけは缺かすまい」よりも「お薬だけは缺かすまい」の方が本當に人間らしい缺點をウソと出すことが出来ると思ふ。さう云つた常識でない人間の意氣地なさを臆面もなく出したところに本當の人間の姿があると思ふ。その點まで作句の標準を進めたいと思ふ。此の句は作者の次の句を讀めば、嘘を云つては居らないと思ふことは受入れられるが、餘りに弱々しい心である、生活に即してはゐるが、生活そのものが、今少し人間味に薄いと思ふ。

路郎……春三氏の言はれたことは非常に面白いと思ふ、然しそれは春三氏の人生觀であつて、作者にそれを強ひることは難しい事だと思ふ。作者自身が自から強い所へ出て行かれることは春三氏と同様に望ましいことではあるが、その時その時の感想を句として表はす場合には、これだけの句が咏めれば誠に優れた作家だと言はなければならぬと思ふ。

山雨樓提出

お前には泣いて居られる閑が ある

雅 幽

山雨樓……此句は、表現上に或る良い味を持つてゐると思ふ。句を咏んだ態度は、丁度人に物を言ひかける様な風であるが、その精神

は自分の瞑想を、さういふ手法で表はした様にもされる、私は後者の方に解し手法で生かした句だと思ふ。真正直にこれを解するならば、作者のいら／＼した性急な性質が受取れるが、それだけでなく、さういつた心持を手法によつて自分の、一面深いところにまで掘下げ自分の姿を振りがへつて、味はひ眺めてゐるさういふ氣分が出てゐると思ふ。川柳でも此處まで自由に表現出来るさういふ、良い手本を示してゐる様に思ふ。お互に川柳に親しんでゐる者はさういつた汲取り方をするが、川柳に餘り親しない者は、さういつた句を極めて無難作に輕視し、或は見脱して丁度らうと思ふ。それは古い川柳の餘弊が祟つてゐる證據である。川柳にはさういつた心持も咏んでゐるさういふ事を世の中の人々が、味はつてくれるならば、川柳はもつと社會に歡迎されるだらうと思ふ。兎に角僕は此句は、自分の瞑想をさういふ話しかける様な手法で生かした句であると思つて、敬服してゐる。

松郎……山雨樓氏にお尋ねします、輕視されたり、見脱されたりするのは、價值をですか

山雨樓……價值や境地でなく、何のこゝや分らぬさ、全然問題にせず、何やこれが川柳かいさいつた風に頭から素通りにされて了ふさ云ふ意味です。

松郎……山雨樓氏の説と正反對な見方を僕はしてゐる。成程さういふ句は、一面非常にウマク言つてゐる様に見えるので、初心者や川柳に深く立入らぬ側の人には、歡迎もされ

ようが、眞面目に句を見詰める者にまつて此句は拵へ上げた句さか思はれない。お前には泣いて居られる閑があるさういふ様な言葉は、從來人を使つてゐる人に、常套語として使はれてゐる言葉で、その境地は陳腐な感じがする。例は種々あるが、その一つに或る商店の主人が使用人を訓しめて曰く「君達は給料が少ないが、仕事に氣に入らぬのと言つて不平を訴へ、イヤになれば辭職すればそれでよいが、自分は氣に入らないから云つて辭職は出来ない」と警告染み付たことを言つてゐるが、昔からの高僧さか偉人達が言ひ残した格言などは澤山ある。川柳によつてこふいつた點を句にしたまでのことださ感ぜられる。不親切な見方かも知れないが、作者としては巧みに言つたつもりが、成功してゐない、境地は受取れるが、こふいふ表現にしたことがキツだと思ふ。

路郎……僕は山雨樓氏の説に同感である、僕は此作者と非常に親しい間柄であるからその句の境地に幾分惚れたさういふ見方で此句を抜いたのではないかと云ふ事を、僕れて居たけれど、山雨樓氏の説に依つて、自分の見た事が氏と一致したことを嬉しく思つてゐる。此の「お前」さういふのは勿論細君のことであり、そして此の若い夫婦は可成り現代の生活苦に悩まされていら／＼した生活をしてゐるのである。そしてその夫の心境を咏んだ此句から夫婦間の間隙が覗はれると思ふ。その點で新しい句として推稱するに足る。

松郎……自分の句としての見方は無論女房

であつて亭主の心境を味つたものと思つてゐるが、その表現が前に云つた一例のやうなことにあてはめられるのが缺點だと思つたから主張したのである。

紋太……僕は鋭い作者の心持を受取る。此句は作者のものとして立派な句になつてゐる。言つてもよいと思ふ。だが僕の思想から言へば、こゝに鋭い心持を文字にして表現する時にその心持と作品との間に或る矛盾を感じさせられる。句にして發表する時には生の儘でなく、今少しくゆつたりした氣持で出したいと思ふ。

春三……句の意味がよく分らない、泣くといふ事はどういふ意味ですか。

路郎……泣くといふのは、生活苦に泣いてゐるのである、いつも夫婦間の争鬭の種となつてゐる生活苦を泣いてゐるのである。泣くといふ言葉は愚痴を解してもよいと思ふ。兎に角細君は家庭に居るからいゝんな事を考へる暇があるが、主人公は生存競争の激しい活社會に立つて働いてゐるので、せめて家に歸つて細君に慰める言葉の一つも聞かうと思つても、細君から金が足りないのやれ何かが、この泣言を列べられると、實際自分は破裂させたいやうな疳癪玉も、失職の憂目の前には辛抱して歸つて來た生活苦を泣かうにも泣く暇さへないんだ、それに俺の心も知らないで泣言を列べるのは何事だ。疳癪玉を爆發させる場合に言つたので、この泣くは生活苦から生れた泣言、愚痴「ほんに浮

世は儘ならぬ」と嘆いたその嘆きを指すのであると思ふ。

春三……泣くといふ意味は分つたが、生活苦といふ意味だ。余りヒンと來ない。

路郎……それは君が餘り考へ過ぎるんだらうと思ふ。

春三……泣く暇があることであるから、作者は泣く暇がないと云ふ事が感じられる、だから別に夫婦間のことに限らず、友達の間でも非常に苦んで來た者は、君はまだ泣けるだけ幸福だよなぞと、よく云ふことがある、その意味にも取れないことは無いと思ふ、生活苦とは考へられない。何と云つてもよく解らないから又考へて置きます。

川柳塔 松郎提出

息子とつてはい北風舟々々

松郎……此句は非常に真い、境地を掴んだものだと思ふ。最も熱心な新進作家の舟々君が豚んだ句だと思ふ。非常に嬉し氣がある。さうが、此の句の構成に對して「てになは」の點が私には大して難さ。いふ事は出來ないが「息子とつて」「のさ」が少し耳觸りに感じられる。息子に「さすれば、もう少しのユルミも無くなると思ふ。此點に就いて皆様の御意見を伺ひたいと思ふ。

路郎……若い作家にしてはウマ過ぎると思はれるほど、びつたりして句である。十四字詩としたことが、更に此句を引締めてゐる。松郎氏は「息子とつてはつる」の「さ」の字を「に」の字に變へる。さといふはれてゐるが、僕は「さ」を「に」に變れば至つて平凡な句

になつて了ふと思ふ。「さ」であつてこそ始めて生きた句で「に」「さ」をどれだけ違ふか云へば「さ」であれば「はいる息子」が先づハッキリと眼に浮ぶ。「に」であれば「風」がはいる。この方が強くなつて、息子の姿が何處かに消へて了ふ。それで息子の遺溺ない氣持といふものが消し飛んで了ふと思ふ。であるからどうしても此場合は「さ」でなければならぬ。

紋太……僕は原句に賛成である。息子と「共に」の「共に」が、略されてゐるのと違ひますか。

山雨樓……息子と共に、いふ意味だつたら一種のウサチと思ふ、真い所を掴んでゐるウサチかも知れないが、ウサチであると思ふ。此場合「息子と」が一當真いと思ふ。息子が何處までも主である。息子の心持が句の裏に隠れてゐることが、此句を真いものにしてゐる。息子と共に息子について北風が遣入つた。云ふことにすれば、川柳味を以て色附けたスケッチに墮し。ウサチとして排斥したい。此場合は息子が主となり「息子とつてはい北風」と言つたところに得も言はれぬ味があり、その息子の心境を次から次へに聯想させられ、豊かな藝術味に浸ることが出来る。實に良いところを掴まれたものだと思ふ。

春三……僕も山雨樓氏の意見に同感である。「さ」で真いと思ふ。兎に角ウマイ。

松郎……昔な原句の「さ」で真いと言はれるが、私は「に」の方がよいと思ふ。「に」すれば句そのものの、表面上よりも、寧ろ句の生命

さする。餘韻餘情を生かすと思ふ。そこであれば息子が主となり「に」であれば北風が主となると言はれるが、私が「に」を主張するのはそれが全然反對で「に」にしてこそ始めて息子が主となると思ふからである。即ち息子「に」であれば、息子が主となり、息子「に」であれば、息子が従となると思ふ。「さ」と言へば息子が動くやうに感じられ「息子」とついてはいる「さ」の意味は息子と北風が誰かの後についている「さ」云ふ風にも考へられないことは無いと思ふ。さういふ意味から言つても、息子に北風がついてはいつたさ云ふ事は原句の「さ」よりは、句の表面から見れば幾分弱くなる嫌ひはあるが「に」とした方が文法上穩やかであつて「北風」そのものが従となるから良いと思ふ。

紋太……僕はさう思はない「息子」(共に)はいる北風「さ」云ふ意味だと解してゐる。息子と北風と一緒にいる「さ」云ふことが、主であつて息子が主とさか、北風が従であるとか二つのものを別々に見ることは違つてゐないかと思ふ。此句はウガチの句で、息子と北風とを列べたところに、妙味が津々さとして湧いてくる。而かもそのウガチが少しも表面に露はれてゐないところが、此句のよいところだと思ふ。

路郎……「さ」に就いて松耶氏は文法上云々と言はれてゐるが、何か思ひ違ひをされてゐるのではないかと思ふ。ついてはいる北風「さ」いふのは息子の遺瀨ない氣持を表現したものに過ぎない。「北風」そのものは「息子」

と同格ではない。だから文法上云々と言ふことは私の言つてゐる方が止當だと思ふ。

春三……僕は此句では「息子」と「北風」とを對照した批評を好まぬ。息子「に」ついてはいる北風となるウガチの様に「さ」となるさ少しもウガチの感じを受けず、息子が生きてくる様に思ふ。強い「息子」と「北風」と此較する必要はない。又松耶氏の文法上云々と言はれたことは、近頃の新しい川柳家が「てにをは」の使ひ方が間違つてゐる句を作られることがある、のを訓じめられたものさ解してゐる、それで松耶氏の言はれた意味から言へば「に」で文法に合つてゐる様に思ふが然し「さ」の方が假に文法を破つてゐるにしても、その破つたことが問題にならないほど藝術味があると思ふ。

路郎……「息子」についてはいる北風「さ」いふ場合には(その意味なら「に」でよいが)「息子」ついてはいる北風「さ」は息子についている北風「さ」いふ意味ではない、何處までも原作の「さ」としての意味を尊重して行かなければならぬ「に」にしては意味が變つて了ふので全然批評の上に差違が生じてくるのは當然である。先刻紋太氏の言はれた「共に」といふ文字を入れた場合には「息子」と「北風」とは接續詞「さ」によつて同格となるが、此句は「息子」に對して「はいる北風」が補足語の形をまつて、その氣分を出したものである。

春三提出

腹這ひぬ陽のいろの青ささみしさに

春三……僕は思ふ。此頃の句は世帯持の句が

多くなつて、同じ生活句でも獨身者の懷疑的な青年の氣持の横溢した句、例へば戀を戀するとか、バーの赤い灯に憧憬れるとか、人生の春を思ふ存分に味はつた句さといふ様な若々しい氣分に満ちた句が随分ありさうに思ふが、その實は案外少ないのに驚いてゐる。此句は「さ」に異い句だとは思はないが、同感してゐた。句を見て、胸の用意がなか／＼周到で陽のいろの色を「色」で「ささみ」さ云つた後に淋しさ「ささみ」さ云つてあるところなど、用意が整つてゐる此句の場合を想像してもスキの原が、砂原か、或は口笛を吹いてゐるのか、ハッキリ分らないが、分らぬ儘にその氣持が、青々らしい若々しい氣分が出てゐるのに、同感させられる。

山雨樓……同感である。短歌の領域にも一歩踏み入れた感があり。短歌の表現に優ることも劣らぬと思ふ。こいつた感じはさみすれば、吟む爲めに吟むさういふ様な、感じに取られ易いかも知れぬが、感激に満ちた青年が、人生を思ひ、自然を思ふさういふ心持を歌ふさういふ事は、感激そのものから溢れる必然の欲求だと思ふ。評者の境地によつて、或は餘りに所謂歌を詠むさういふ風に、生優しく思はれるかも知れぬが、此句は青年の氣持を大變詩的に表はし生かしてゐると思ふ。辭句就いての用意も春三氏が言はれた様に周到である。中胸の「陽のいろの」最後の「の」は無くても觸りはない、その方がよくはないかさも取られるが「の」の字がある爲めに音律上こいつた氣分を出すのに、此の一字が非常な効果をなして、一層ふくらみを持たし、感じを圓く出してゐると思ふ。(三十七頁につゞく)



一年前

『累卵の遊び』を讀みつつ

省、ます女、

萬人から敬遠されるようでも、考へものだが、萬人から持上げられる事も、眞の詩人であつたなら、不可能な事情が伴ふと思ふ。して見れば自ら黨派も出来、好き嫌ひも生じ、親縁の別もつく、同じ川柳道に精進しつゝも、形式的な文通位で終始してしまふ例は餘りに多い、然し常に機縁は豊かなのだから、ある一事により厚い親睦が結ばれる、麻生氏も自分はいつからの關係であるか、古い事は記憶がない位ゆゑ、それは通り一片であつたのであらう、大正五年頃？

人形が二人並ぶ戀に成り路郎の作に對して、自分は二人をありの儘に

二ツにしたい、さ差出ぐちを言つたのは覺えてゐる、此の事を忘れないところをみる。作者は御記憶ありや否や。いい句であるからで今だつて嫌ひではない。こんな事を頭に浮べ乍ら、新版『累卵の遊び』の頁をくる、自分は『川柳ふころ手』を知らない、だから此書の爽かなそして、ゆきりのある編纂振りに快感を覺へ詩的衝動をそそられ、藝術的鑑賞の尊嚴を保ちつゝ、憧憬にさまよはむとして居る。

店先の火鉢客まで押してゆき助六お二階を起と火事を見て貰ひ藍之助備かる云ふは母への手紙だ彩秋青年の全感敵が、よし未完成でも、正し

い昂奮の下に當然の表現を求めてゐる驚異は見逃し得ない、所謂先輩の作が世間並みに列べられてゐない事は、特徴の一つで、そこへ新しい川柳の革命精神が根づけられ概念化觀の打破もある。(省二)

モウ一年三になります、四月十一日！二柳子様の御案内で、赤や紫に彩られた草花の咲き揃つた畑を縫つて走る郊外電車に、此頃急速の發展をした事情、將來の計畫等のお話を承はりつゝ、鳴尾の選日莊に近づきました際、あそこにお嬢さんの立つて居らるゝ家ですさ指さされました、此時竹馬はある事を直感したそうです、それは二階の戸が締められてありましたからで、お父さんは自動車で病院にゆきました、いたいけな言葉に三人眼をみ合せました、直に大阪医科大学病院に引返しました、アノ長い廊下を歩きました、さ、迄も病棟を越して歩きました、婦長さんの許可を得、先づ二柳子

光景ではありませんか。(ます女)

様に入室を願ひ對談し得ますかを確めて
頂きました、實にこれが私共の初對面な
のでありますから竹馬は、只沈黙相見て
心を傳ふるのみ、二柳子様の側面に立つ
てまみゆるも直接ならざるよう致してゐ
ました、路郎さんは熱に高潮した、然し
底力が見受けられ、口喝を覺わられつゝ、
二柳子様と竹馬の位置を代るよう到手を
差しのべられ「歡迎句會にも出席し得ず
洵に相すまぬ、それに貴稿唐柳短解の誤
植が多くて御不満であらう、病中口述し
ても奮闘して期日前に雜誌發送をする決
心である、貴下の喘息手當方法が柳秀博
士には依頼してあるから是非逢つていつ
て下さい」云、言葉を續けられました、
竹馬は感謝のうなづきと雜誌は乍不及お
力添へもしますからと、又もや全く沈黙
に返りました、路郎さんも奥様もお顔が
曇つてくる、殊に涙もろい私は耐へる事
が出来ません、二柳子様は下を向ひたま
へ身動きもされず、思へば何んも劇的な

れば日曜、美晴、川柳家の來訪踵を亞ぎ
此の日も泊す。(省二)

あの重忠程に、自分の宿病に同情を示し
て呉れるなみくならぬ純真剣な態度は
一生忘れられない強烈な感激的印象であ
る。廊下ですれ違つたのが柳秀博士であ
つたのも、君の攝理のようだ、詰所で博
士に挨拶、麻生氏の容態が油斷がならぬ
事、看護方法に就て承はつた後は、喘
息談となり博士の御令息も同病、處方箋
を頂き女猿の黒燒話も出た。

麻生氏は一大信念「人間的な川柳的な」
の下に病魔に闘ひ、短日數にて退院回復
せられたのは偉すすべきである、却て東
都の旅館に倒れた自分が見舞狀を受くる
交代きなつた。

歸途川柳雜誌社例會に出席するを得て、
第二の初對面をなし、名物「萬よし」さ
んで病後の両者がビール、カッブ
を挙げた、其夜は千本通の新居に連れら
れ三時迄夫人と鼎座柳談に耽つた。あく

竹馬は書生時代から外泊した事はないと
申してゐます、無論川柳家のお宅に御厄
介になつた例は、私が知つてからは一度
もありません、ですから其の二泊は全く
の皮切で、印象的なものであります、横濱
の榎木庵でも布團まで用意されてあつた
のに泊らず、東京の冷たい旅宿へ辿りつ
くのでした、ひさりツ子の我儘者は外泊
する資格がないのです、揚枝をくはねて
一町隔つた新設の朝湯に、路郎さん二
人きり川柳談をやつたのは愉快だつた、
温泉氣分だ、アレで病氣が治つた、大阪
の郊外は東京より好い、遙に煙突の頭が
かすむなごは別趣だね、半歳位大阪附
近の探墓をやる計畫を樹てゐます程、
禮讃者となりました。(ます女)

旅館の女中ミ馬鹿咄するのは嫌ひだ、イ

やあの女臭（おんなくさ）がいかぬ、だから旅行下手（りょこうへた）でおつくうになる、これからは時に川柳（かわらう）家の御家庭（ごけいたい）を騒（さわ）がす事（こと）さなろう、それに付けても健康（けんこう）なら、風呂（ふろ）三酒（さんしゅ）だ、一浴（いちよく）後の一瓶（いっぺい）きりが好（よ）い、それは直覺（ちくかく）的（てき）都市（とし）歡（かん）樂（らく）だ、『累卵（るいらん）の遊び（あそび）』に

風 呂

浴槽（よちよう）にひたる三山（さんざん）が見（み）ぬな
朝風（あさかぜ）呂（ろ）三酒（さんしゅ）落（お）たは
内風（うちかぜ）呂（ろ）の棚（たな）に娘（むすめ）のものばかり
凡（およ）吉（きち）平（へい）

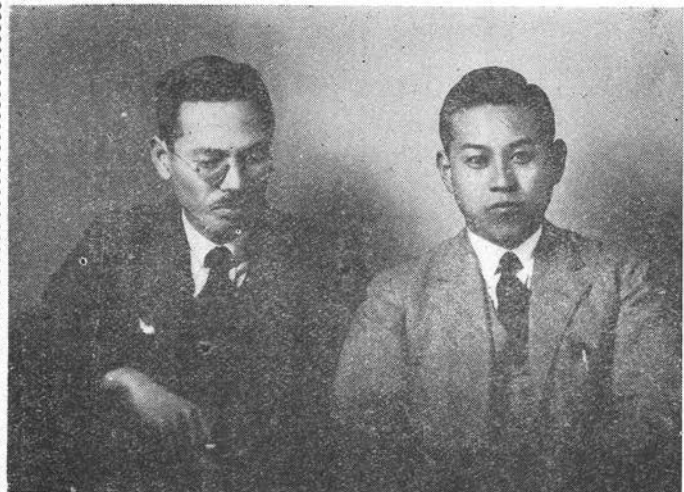
酒

吞（の）ます氣（き）でゐるに資本家（しやほんか）罵（のの）る
約束（やくさく）をあぶながら程（ほど）に吞（の）み
電話（でんわ）からさつぱり酔（よ）め酒（しゅ）に成（な）り
史（し）風（ふう）乃（の）郎（らう）

こんなに利用（りよう）して生活（しやくわ）の興趣（きんそう）を體（たい）得（とく）する
事も句集（くしふ）の恩恵（おんけい）である、集大成（しふだいせい）せられた
ものは、頁（へい）を追（お）つてゆく裡（うち）に、其（その）の時（とき）其（その）の折（せ）の利那（りな）の情緒（じやうきよく）が明（あ）かに背景（はいけい）を點綴（てんじゆ）し
來（き）り吾人（われん）の境地（きんち）に緊張（きんかう）味（み）と複雜（ふくさく）味（み）を加（く）へ
るそれが其（その）通（つう）な詩境（しきやう）なのである、自分（じぶん）は
今後（こんご）の自分（じぶん）の生活（しやくわ）裡（うち）に『累卵（るいらん）の遊び（あそび）』が
必（かならず）織（お）り込（こ）まれる事（こと）を信（しん）ずる。（省（しやう）二）

◆ ◆
多くの川柳（かわらう）人（ひと）に應（こた）待（たい）なさいます霞乃夫人（かみのふじん）

は、多幸（たさい）なり三存（さんぞん）じます、川柳（かわらう）に活（い）きて
ゐます主人（しゆじん）をもつては家庭（けいたい）的（てき）にも亦（また）決（けつ）し
て他の願望（がんぼう）はありません、身（み）も心（こころ）も財（さい）も
一つに川柳道（かわらうだう）に捧（たてまつ）けて始めて一蓮（いつれん）托（たく）生の



極樂（ごくらく）現成（げんじやう）でありませう、今（いま）や一年（いっねん）三過（さんか）ぎ
やが「再會（さいかい）の日（ひ）には女（おんな）は女同志（おんなどうし）のつきせ
ぬ物語（ものがたり）も致（いた）しませう、私も『累卵（るいらん）の遊（あそ）び』
を拜見（はいけん）させて頂（いただき）きます。（ます女）

夜の二人

春（はる）の踊（おど）で道頓堀（みちとんぼり）の夜（よ）が何ん（なん）と
なくくすぐつたいやうな感（かん）のじ
する四月（しがつ）十一（じゅういち）日の夕（ゆふ）、仁川（にせん）支（し）部（ぶ）
の矢田（や）右（みぎ）大臣（だいじん）君（きみ）が來（き）た。二人（ふたり）で
ビール（beer）の冷（ひや）やかさを味（あじ）つて歩（ある）いた。ジャズ（jazz）の中（なか）にも浸（ひた）つた。たゞ
漠然（もくぜん）と歩（ある）きもした。サクラの國（くに）
のゲイシャ（geisha）ガール（girl）も下（くだ）さらぬの
でただ春（はる）の夜（よ）を呼（よ）び吸（す）するこゝに
よつて満足（만족）した。かくてどんな
女（おんな）でも美（うつく）しく見（み）へるほゞに酔（よ）つ
て、さある寫眞館（しやしんかん）に飛（と）び込（こ）んだ。
これが其（その）時（とき）の記念品（きねんひん）である。若（わか）
い方が矢田（や）君（きみ）である。（路（ろ）郎（らう）生（せい））

川柳漫畫 人の一生 (三)

柴路
舟郎
畫評

半と出てほつたぐられし二千兩

京郎

由來自惚れのなき人は稀也
政治家にして殊に然り。普選
の鐘一度鳴り響くや、猫も杓
子も立候補して我れこそ新時
代の代議士たらん。恰も
蜂の巣を突ツつきたるにも比
すべし。しかも、明けてくや
しき玉手函、美事に落選して
保証金二千圓也。泣き別れの
悲劇を演じたるなり。一寸借
りて來し保証金なるに永き借
金となりて残る。誰をしも恨
まんか。あゝ。



猫ぶつた旦那それから縁やがられ

毒仙

膝に乗る猫は弗図たる旦那
ツクよりも確に幸福なり。
妾の留守に旦那の疳癩がた
まゝ猫に及ぶ。
「猫に何んの罪があるので
す。打つなら妾を打つて下
さい」こいふのが妾の云ひ
分なり。旦那の待遇この日
より更に悪化す。



げんみ

レディメイド合はぬところは口できせ

虚白

世は安直に安直に流れ
ゆく。それを文明云は、
文明はあまりにのろはしき
ものならずや。

人間の型に合はしてつく
らるべき洋服も、今や、洋
服の方に、人間をあはすべ
き世の中はなれり。紳士
にさへレディメイド紳士と
稱する階級を生ず。愛たて
し。



はま

葬式の人夫で食へる道もあり

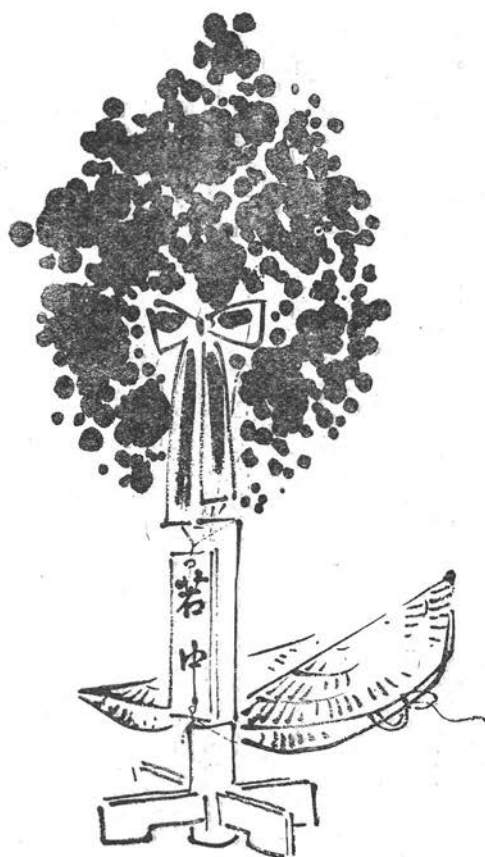
白蝶

第一次普選の代議士たら

んとする男叫んで曰く。

「職を脱へよ！ 食を與へよ」

然り、今の世の中に一つの職を獲得することは決して容易なることにはあらざるべし。一碗の食を得るにさへ汲々たるもの又すくなしとせざるなり。兎にも角にも生きざるべからざるの時豈葬式の人夫たるこ、否ミを選ぶの暇あらんや。





時代川柳大觀異見

西原柳雨

昭和元年の夏頃に春陽堂の編輯員某氏來つて浩漣なる原稿を示し出版すべきか否やに就いて意見を聞かれた二三頁繰つて見れば非常に努力の籠れるもの、解説も中々研究を経てあるのみならず、武笠山椒氏の校閲もある上は一も二もなく引受けて出版せられたきことを慙慙して置いたが、數ヶ月後に立派な本となつて現はれ、森田氏より一本を惠まれたのである、兎も角も直に一遍通り讀了

したが川柳に對してかゝる熱心なる篤學者を出したことは何さいつても愉快に堪へぬ、よくも是丈多數の句を集め是丈け簡潔なる明解を附せられたものかなと衷心から感服した、聞けば現在府立中學校の教職にある人にて昔の同業の懷しみに堪へず、直に會見を求めて、一夜ゆるく柳談を交換したのである、ごんな大家の著者でも岡目八目的に穴を拾へば多少はあるもの、一讀するうちに是はさ思ふ分に愚見を附し參考迄に森田氏に贈呈した處が、非常に感謝の辭を添へて數月の後に返草せられたので、更に鳴風氏に送つて氏の異見を徵し、その儘箱底に藏してゐたが此度三面子先生の異見御發表になつたのを見て、是は矢張り世間に發表して汎く大方の異見を求め

た方がよろしからんご森田氏と相談の上、貴社に投じた次第である三面子御説と一致する點もあれば相違せる所もあるが其儘として置いた、何時もながら詳細なる三面子先生の御發表を見て更に感じた點々や其後思附いた條々はこれが濟んだら更に稿を改めて書いて見たいと思つてゐる。

二四

九十ぬけても馬鹿でない軍師也
六文錢の眞田

三三

じやまな石よるは一人でかなしがり
松浦佐用姫さあるも。小夜中山の夜泣石であらう

三八

めかりのきいた神職が鑛の役
鎌足さあるも「大晦日のめかりの神事」がさ思ふ

四二

身揚りさ出さうな所へ蜘蛛が下り
吉備大臣の條下にあるも寧ろ衣通姫の條下に移し且つ句頭に

四八

○印あるべきものかと思ふ
我國の恥づかしくない歌をよみ

四九

仲鷹の條下にあるも宗任の方が適切ではあるまいか
百人に一人綺麗な股から出

柿本人丸でもよからんも綺麗なの用語から推して菅公さした
い様な氣がする

六九

中納言ぐらゐるをくれるしはい伯父
土鍋の行平さあるも大納言に及ばぬ中等の雛のおもふ

七八

業平を追ふのに水も逃けるなり

二條妃の條下にあれども八五頁のあたり武藏野のあたりに置くべきはあるまいか

七七

天窓ばかり見ゆる追手が東立やア
も或は同列の句か

八五

は仕丁等の用語より推考すれば小督の方の様に思はる「武藏野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり」の昔話には仕丁は居らぬ答かこもるふ

九五

天神へ飛梅あたごなぐれ也
頭註に愛宕の土器なげさあるも廿四日愛宕下の年の市から翌

一〇〇

日の天神縁日に運ばれる梅の植木であらう
穀山の條下に入れあるも北野の千本松さしたい

一二二

宇治の螢がそれて来て巻さなり
隆國の拾遺物語の條下に置かれたるも紫女の源氏ではあるまいか

一三〇

十月は歌仙の中に鎮座也
上野御本坊

一三二

叡山の謀反は信頂坂を下り
上野々吉原行

一三四

樂人は上下で住む桃の御所
相馬御所さあるも雛棚五人雛にてはなきか

一三四

お妾も相馬の内裏部屋へ立て
是も雛、相馬内裏を部屋へ立つるの意

一三五

じやく馬は時々くらをかへるなり
將門でもよいか知れぬが勝氣な女郎のやうな氣もする

一四三

鳥の羽すでに狐が食ふまこころ

葛の葉さあれども玉藻前であらう

一六六

五白から一体ぬけて人にすれ
普賢さあるも「寶頭嚴尊者」にてはなきか

一六七

御門下槍持蜘蛛の巢をはらひ
頼光の條下に置きあれど疑はし只の槍持さもされる

一七三

鬼の手を互に出して酒をのみ
大江山さあるも或は只三拳さかいふ拳をやることではないか
さと思つて見た

一八一

雷の屋根へ渡邊さんと落ち
羅生門の部に列べてあるが無論難はあるまい併しながらどうせかゝる句は半分は戯曲の上に立脚してあるものさすれば戻橋の方に置いた方が適切かとも思ふ

一九五

人さわぎ鬼ふり袖が三三人
紅葉狩さあるも只踊子などの這入つた酒座かと思ふ

二〇三

油手の脈を目出度見てもらひ
祇園の油坊主の處に入れてあるも疑はし但し句義??

二二〇

元日に大根一切れ食つたまふ
野間の義朝さあるもその理由不可解、原本果して大根さあるか或は假名にて「たいこ」さにはなきかすすれば太鼓即ち幫間さも取れるやうである、とすれば一切は雜煮でもあらんか

二二七

笛の音に琴の調子も狂ふなり
小督さあるも矢圖の淨瑠璃姫の方であらう、その隣の「大さうな色事門で笛を吹き」も又同頁二、三行の句も或はその類句が少くさ小督ではないやうに思はる

二二八

神國を人をたまさぬ琴の音
小督の條下にある理由が解らぬ且つ頭註の華陽夫人は孔明とした方が適切ではないかと思ふ

二二九

をし武夫を冷ぞうめんにする
私も嘗て川柳藤栗毛に難波徑後さして布引の淵の條下に置いたが後で曲解さ覺つた同じく天明代の句に「憎しい武士さう

めんびつへ入れておき」に出會つてさる史的の咏句でないと思つた、云つて未だ是さいふ解は見出さぬひよつとすると經節が何か意外なものかも知れぬ。

二三三 後から招いた扇毛受なり

清盛さあるも熊谷ではないかと思ふ

二四一 申に手をはし足をば亥にのばし

鶴の條トにあるも甚だ疑はしと云つて自説もない、亥に足を伸ばしは玄猪の火燵開かと思へど中に手を伸ばし不明或は康申に孕んだ手長小僧かとも取れぬこともないやうなれど……追記康申の夜から蚊屋をつるさいふ慣例ありし流矢居の御税を見て大に喜びその出所を御問合せた處確とした出所はないこの御返事に接し大に失望と再び此句に印を附けたり

二四五 羽ものか毛ものかおほつかなく詠み

けたものか鳥ものかおほつかなく詠み

同 ひすべし／＼源三位に御意

以上三句の鶴の條下に置くはいかゞ御一考を乞ふ

二四七 頼政は嫁の五器まで拾ひ込み

是も同様響る「椎を拾うて」の邊に置きたいと思ふ、嫁の五器とは椎ざんぐり、なごの殻斗のことである

二五五 頼政は前狂言をしてしまひ

平等院にあれども是こそ鶴退治ではあるまいか何座かの脇狂言にあつたやうに思ふ

二七五 山鳩の冥加は雲の上へのし

石橋山さあれども山鳩色の御衣であらう

二七七 千年もなじんだ様な御伺つけ

戒名を鳥に聞かせて放すなり

此二句鎌倉の放鶴中にあれども甲は只御殿の庭などに養はれた鶴、乙は普通の放生會と思ふ

二八九 信濃者だけ大軍をくひこめる

義仲でもよからんも秀忠の大軍を牽制した上田の眞田の方が

適解ではあるまいか

二九四 四十九の嫁高盛をべろりくひ

頭注に「おばら四十九で信濃へ嫁入り」の俚諺を掲げあるが夫では女性の信濃者でよかりさうに思はる夫さも巴の再嫁か四十九さいふ史實でもあれば知らぬが……

三二一 つまもたぬ身もましはやさ尼公いひ

松ヶ岡の尼公さいふ説も聞いて疑ひながら其方にして置きたる今此當に二位尼さあるを見て又新らしき疑を加へた今少し詳しく頭註が慾しい

三二七 けし／＼は二匹ならんだやうな紋

頭註堀糸の紋は二枚矢羽さすべきか

三三一 熊坂はのびを打つたが落度なり

頭註にのびをうつ、愚圖／＼して時をすこす、さあるが打つは追つの間違にてはなきかとも思へど勿論確然とはいへぬのびを追ふさいふは、こつこく後をつけ廻はすの義かと思つてゐる

同 盗人は虎さ熊さで名が高し

頭註虎は陽虎さある、夫でも差支はあるまいが日本にも虎王さかいふ賊なかつたか一應調べて見たい氣もする。

三三七 頼朝を棧敷で後家はつけね／＼

靜の舞の條下に並べてあるも只頼朝に扮した役者に目星を附けるさいふ義なら／＼の句ではあるまい且つ少くとも句頭に○印あるべきものと思ふ

三四〇 天狗まで歌にうたつたよいお寺

鞍馬の牛若さあるも高時の方かともおもはる

三四四 大手が四郎からめてが九郎也

義經の條下にあるが四郎さ誰の事が聞きなした夫は夫として新吉原の四郎兵衛さ九郎助を啄んだ句には相違あるまい

三四八 鎌倉殿の嚴命で縁を切り

義經さあるも、松ヶ岡の句さして省除すべきものではあるまいか

(以下次號)

時代川柳大觀に就て」に就て

森 東 魚

○和歌は柿詩は李がよく熟し (四九頁)

「脱字あらん」さあるが、「かううたは李が」と讀ます作者の考ではあるまいか

(九三頁)

○惡筆へまつてくれろは能書なり
菅公の句ではあるまい。長屋の先生手習師匠が月末なり年末なりの書出しに閉口してゐる場合だらうと思ふ。

○安藝守時分はふつこほごのこま (二二一頁)

「ふつこ」は鱸の小さいのを云ふ、せいごから立上つて「ふつこ」なり更に大きくなつて鱸となる。そこで句意は、平家物語にある左の一節に因んで、清盛が安藝守時分はまだ大いした勢力はなく「ふつこ」位の所だと洒落たのである。

(平家物語)

清盛未安藝守たりし時、伊勢の國安濃の津より、船にて能野へ参らるるに、大なる鱸の船へ躍り入りたりければ、先達申しけるは、昔周の武王の船にこそ白魚は躍り入りたるなれいかさまにも是は權現の御利生さ覺候、参るべしと申しければ、さしも十戒を保ち精進潔齋の道なれども、自ら調尾して我身食ひ家の子郎黨どもとも食はせらる。その故にや吉事のみ打續きて我身太政大臣にいたり、子孫の官途も龍の雲に上るよりは猶速かなり云々とある。

○一つ目を持てば座頭も出世なり (四五八頁)

勸助の句ではない。一つ目は「本所の一つ目」であらうと思ふ。總祿屋敷が本所一つ目にあつたのだと聞かれてゐる。即檢校に出世して一つ目の屋敷を持つてば盲人も出世だと云ふ事を、盲目さ片目の様に對照した狂言仕立の句であると思ふ。

○あんまは埋めてもけんぴきは越後勢 (四五九)

「謙貞の駄洒落か」とあるが、さてはなからう。「けんぴき」と云ふのは「障害になる」と云ふ意味合ひで、恰も「頭痛になる」と云ふ事が「煩ひになる」と云ふ事に用ゐられるのと同じ工合である。これは菅て私が川柳詩第四號に書いた事であるが再記しやふ。他の例句に

○よし町のけん、きになるいろは茶屋 (樽六編)
と云ふ句がある。「けん」は「即けんぴき」で、下谷にいろは茶屋が出来たので坊主客をさらられ、よし町の障りになる」と云ふ意である。尚「婦美車紫鹿子」の一節に左の如きがある

「これが七間茶屋と云ふのか、大ぶい、女が見ゆるの、こ、は、れこ」が出来るじやないか「イヤお前よく御存でござります、それで高輪のころび茶屋がきついけんぴきさ十八町の内ころびでないのは數へる程しかござりませぬ云々

「けんぴき」の意味合は、これで推測出来る
○市之正質藏に手間取る氣なり (五〇九頁)
淀君の人質を謀つた事であらふか判然せぬさあるが正に淀君人質の件に違ひないそして質藏は淀君を住はせる爲の新殿の意味で片桐の意見では、淀君人質の件を兎に角承諾し、さて、其の住居の事に就いて、何のかと手間取らす中に、家康が死ぬなり、何か他に方策の運らし方があらうと云ふのであつたが用ゐられなかつたので、句はそれを詠んだのである。

○御國へは扇でひびく芝の鐘 (五二頁)

増上寺鐘の口の厚みが扇の丈ほごある事さあるが、は不要だらう釣鐘の厚さに扇つかはれる
の句が川柳江戸砂子に載せられてある。

○金玉がをしきうけぬ御墨附 (五二五頁)

此の句は、故卯木氏が改訂増補川柳江戸砂子中に書かれた筈である同書出版まで解を保留したい。(昭和三、三、一〇稿)



川柳塔

○ 太田朝陽

家賃から先に聞いている國の母
言譯は只實費です實費です
きつちりさ先家賃する新世帯
公用の一人仲居にもてゝるる
沙干狩り笑つた人もからける
三味線の引けるか中へ引出され
波菰草と刺身に飽いて子供死に
指物屋ほんまの腕を見てもらい
おりてやつて下さい坊やが泣いてます

○ 矢田右大臣

カラー汚れて掛け馴れたかい椅子
一家みな無事漬物も漬けられて
退院へ明るう門の東西屋

出納課ものともせず札を讀み
水捨てて豆腐屋軽く賣れて行き
繪看板都へ來たを意識する
斷髪の手切金さもやう云はず
きちんき座れば丁稚膝が出る
轉寢は童心に歸へる日もありて

○ 松盛琴人

偽刑事まだ吾輩はなき云ひ
○ 奈真 (二句)

大佛は埃りの巾も見せてるる
四十九の夢はこけたり走つたり
先ンの方のやうにはあしや出來ません

○ 横田眠聲

金力に權力に俺はおじぎをし

嚴格な父にも酒の上の事
帶の柄ここにも春は惱まし
鯉のほりきちんさ座る子は弱し

○ 岩崎柳路

ポストまで行くのへ客の傘を借り
友にされ少し覺へた朝鮮語
鳥の名を覺へただけで儲け得ず
淺草へ歸へり乞食のほつさる
營舎にはもたない程櫻咲き

○ 高見柳骨

上手だと言へば商賣だきけなし
手紙では熟語の交る世辭もあり
先生に惚れられ困る許嫁

○ 酒井駒人

井戸端の素足も朝の姿なり
灯もして淋しい二三軒の夜店

○ 庄萬よし

駄目だきは母へは言へぬ聴診器

山中にて (二句)

花吹雪泳いで見たい淵へ散り
乾からびた嘘で死金握つてゐる

○ 三好革郎

逆さまに切手を貼るも意地さ知れ

川合舟々

二十圓位を留守へ来てまでも
重箱へ鮓を詰めるさ書になり
夕飯も無く白酒に寝て仕舞ひ
失職の様に居るのが花婚さ
おさらひの聲たのもしく聞ひて出る
別れる時今の言葉の一つだに

○ 岩本素人

生きるのも死ぬのもいやの飯を喰ひ
毒菌の様に共產黨が殖へ
大衆は入道雲の様なもの

○ 橋本二柳子

信心に石垣なんぞいらぬなり
言ひ負す位なんでも休むない女
春雨がけむり一日休むない女
二三日はなんでも喰ふ妻の留守
おちぎしてゐるに人格を見透かされ

琴泉君の愛嬢を悼む (三句)

さし上げた子が死んだとは思へない
人形を見てもさびしさを来る
父の膝母の膝にも子がをらぬ

山中温泉 (三句)

山中は櫻も匂ひ湯も香り
吉野屋で女に媚びて酒を呑み
石投けて蟋蟀橋を名残りるる

○ 松丘町二

桑の實に唇染めた頃の戀
豚の仔のをかしや乳を飲みこほし
スカートにすがつてマに叱られる
晩酌に訊けばラヂオで今日習ひ
冗談のやうに女給は口説かれる

○ 中野柳陽

引きしまる顔毒藥の瓶へ向き
ある丈けの笑ひの中に牙を見せ
木捻の力すなほにもさされる

○ 安西杏三

握手なごして看護婦の別れたり
回診にみられた所さわつて見
排泄の姿何處やら犬に似る
何時だつて死んで見せるさ長病ひ
永久に死は覆面を脱すまい
退院はビールを呑んで居る云ふ

○ 水谷鮎美

羞かしい事を話すも女なり
背伸して虚空を掴むうららかに
定宿で朝顔の種もらふなり
枯淡な暮しへ櫻漬が居き
病人があるからさ斷つてしまへ

○ 島田翠峰

春風に玉子を賣つた金を持ち
許嫁彼岸詣りは母をさする
時めいた小鳥の餌が切れてゐる
園丁もよいなと思ふ春三日
母の暇はさぶ漬刻むこにする
優しさは母そのまゝの姉嬢
人參の赤きが故に好き嫌ひ

○ 中澤濁水

日曜日留守に留守とを訪ね合ひ
金持も貧乏も同じやうに酔ひ

○ 猪野燕柳

天王寺彼岸詣 (二句)

讀經に母が來そうな灯がゆれる
金のないのへやりさびで惚れて居る
紀元節長靴の子は雪を蹴り

○ 朝田新水

告白も嘘を交へて哀れにし
本名の方が却つていゝ名前
賣喰に屑屋が出入りするばかり

○ 石川双葉子

背中から値ぎる間もない程泣かれ
魚心あるのか後家は兒を托し
若旦那三味より知らぬ嫁をもち

圓から内の女房をたきつける
丸髻が似合ふてゐるよがるよまいが

○ 中見光路

言ひだした切れるく／＼に秋も過ぎ
春の雨一帖はねた床で聞き

○ 桑原京郎

人非人詮じつめれば金のこと
つゞやはたちよ石鹼の泡

○ 兼重白鷗

絹の夜具此の頃肩の凝りを知り
次々に流行を追ふ女の眼

○ 水田黄彩

麻生先生等を迎へて (二首)

改札に捕力のやう見張つてゐる
塵箱に生きん努力の瓜の種
春の風ほゝへ踊れまゝ囁きぬ

粒々集

大阪 塚崎松郎

春めきを知れり赤兒の欠伸にも
金になるかこはあきれるばかりなり
安産を畑へ知らすうらゝかさ
綻びを縫ひつゝ馬鹿の子を思ひ

水を二つに割ればたゞ何も無し
うわさばつかり運ぶおろかさ
泣きやんだあそをかわい／＼欠伸して
處女の戀なまあたゝかくやはらく
こそもあらうに親をうらみぬ
あさましくおひつ／＼の底をみせられて
群衆的にフク落ちてくる
おかしまさはみな息をすひ息をさき
まごまつた金の重みよさみしさよ
一杯の水に寢床を這ひいでて
検束の鼻毛を抜いてゐたりけり

御影 長崎柳秀

大男着せる羽織へ腰を曲け
満員を十能の仲居軽く詫び
満員車子供が前に居ると云ふ
お土産に数へられてゐる子
信心は砂を拂ふて立ち上り
火吹竹雀の戀は知つて居る

大連 佐々木三福

衣洗ふ群へカラスの遠く下り
恠も無く白衣の民に桃の咲く

朝鮮 蛭子省二

袴をつけた朝歸り羽蟻が飛ぶ
籐椅子の女乳房を出しまけぬ
空梅雨の系圖争ふ母の癖
靴下の穴へ鶏がついてくる

金澤川柳大會に臨む

橋 本 二 柳 子

櫻の花の眞つ盛り、人が花見に浮かれ出すといふ四月の十五日、金澤川柳會の主催で、百萬石の御城下に第五回川柳大會が開かれた、本社から路郎先生及び紋太、萬よし、ひろし、舟々赤城の諸氏私の七人が、十四日の十時四十六分大阪驛發の列車で金澤に向つた驛頭には三笑、翠峰の兩君がわざわざ見送つて下さつたので、一行元氣づく。

列車内の貿易

汽笛一聲、汽車が動き出す、待ち兼ねたやうに一升瓶の口が開けられ、御馳走がひろけられる。萬よし君隣席の北陽藝妓が忽ちに共鳴して、酒と麥酒を交換すればひろし君も食物の交換を開始する、こゝに原始時代の物々交換の經濟現象が起り、梅ヶ谷を小さくしたやうな藝妓裙、氣前のよいミころを見せて無暗に物をくれるので、一同恐縮したり、喜んだり、京都へ着くまでは此の美人を中心に騒ぐこと、燥やぐこと、一列車全部を我々一行が占領して了つたかの觀を呈して、景氣のよいこと、夥しい、美人が酒を除き飲まない私にまで酒を勧めに来るの

に閉口頓首、此時ぐらい酒のいける皆んなを羨ましく感じることはない。

一分間の迎送

京都から又客が殖へる。米原を過ぎれば一時に満員、立つて居る人が多い、その大混雑の中で紋太氏は羽織を頭から冠つて寝て居る、路郎先生は腰掛から落ちさうになつて鞆の上に背中を持つて行つて駢聲をあけられる、赤城君はひろし君を立たしめて了つて、長々横になつて居る。翌朝福井で辨當を買ふことになりひろし君を立たして寢に罰金に赤城君を辨當買ひに走らせる。ミころが赤城君は顔を洗ひに行つて逃げ出し、舟々君が代理を勤める。七時三分に小松驛に着くミ小松支部幹事の柳一路君ミ太魚君が饅頭ミ一升瓶を持つて車窓を日蒐けて走つてくる、左黨の連中又朝酒を聞こし召すつもりで大いに喜んで居るミ、「お酒ではありません」ミ言はれて始めてお茶ミ知つてお茶の切れ時であつたので、その用意周到さに、川柳家は矢張り頭が良いミ評判のよいこと、よいこと、饅頭は湯氣がたつてゐる

る。早朝我々の爲めに特に註文して下さつたものゝ一同大いに喜ぶ。然し何分僅か一分間の停車で直ぐに兩君の顔が霞んで行つたので、名残りの惜しいこと此上なし。

千代女の墓

加賀が産んだ才媛加賀の千代女の墓に詣でて、先づ金澤百萬石の文學に深甚の敬意を表して置いて、金澤に入らうと云ふことになり、松任驛に下車したのは八時頃であつた。前夜電報を打つて置いてので安川久流美先生と宮本銀砂子氏がわざわざ松任驛にまで出迎へて下さつたのには一同只恐縮するばかり、脊の高い久流美先生と横に太い万よし君と一緒に先頭に立たれる、それを後から見ると、まるで生きた漫画を見るやうな滑稽味横溢、聖興寺の千代女の墓に詣でれば、櫻の花の下にいさつしまやかな辭世の句碑が立つてゐる。

月も見て我は此夜を可祝哉

私は何さかして寶物を拜観したいものゝ、種々交渉したが、係りが不在のために遺憾ながら目的を達することが出来ないその間に万よし君が句碑の石摺を取られた敏捷さは流石は野球で鍛へた腕前と感心、それより一同電車で金澤に向ふことになり停留場に行けば電車が動きかけてゐる。「オーイ待つてくれ」さ叫ぶと待つてくれら。いさノンビリした電車ではある。

兼六公園の櫻

櫻で有名な兼六公園は聞いて居たが、櫻の木の枝に句を書いた短冊が列ねられて、風流人の持ち去るに任せてゐるころなさは、流石は文學の都であるに感心する。金澤の市街を距て卯辰山を前に眺め北に河北瀉を眺める眺望絶佳の小亭に憩ふて花見園子、舌鼓を打てば、さつき吹く春風に花吹雪が我々の着物に染める。こんな場所が大阪にあれば春の句會を開くのもつてこいで、名句も生れよう、こんな土地に住む金澤の方々を心り羨ましく思つた。

盛大な川柳大會

場所は金澤經濟界の中心、金澤商工會議所、集まる柳人五十名、遠く富山方面からも來會された熱心な方も見受ける。正午開會、賀すみ三氏の「開會の辭」、窪田銀波樓先生の會長としての「歡迎の辭」に次いで本社主幹麻生路郎先生は「作家の態度其他」名古屋の森田森の家氏は「川柳進出の過程」を題する各有益な講演があり、満場水を打つたが如くになつて傾聴する。作句披露も終り成績發表があつた。一等ひろし、二等眼隠子、三等旭仵の成績でひろし氏は立派な花壇と銀カップを戴き、すみ三氏閉會の辭で會を閉じたのは時刻であつた。舟々赤城の兩君はこれまで寫眞班として到る所でパチリ、寫眞を

撮して居られたが此處で一行に別れて歸省される、後に残つた我々は萬よし君を先頭に淺川の河岸五十家で開かれた懇親會に向ふ。ひろし君が貰つた大花環を献けに萬よし君が威風堂々ミ電車道を行進し、繁華な街に進んで行く……。これには流石の金澤の人々も吃驚して何事が始まつたのか我々を見るこゝに見るこゝ、まるで大阪から川柳の宣傳隊に雇はれて行つたかの觀がある。

山中の夜

懇親會には路耶、森の家、紋太、銀波樓、久流美、六葉、柳二郎、眼隠子、銀砂子、すみれ、旭洋、倭兵衛、萬よし、ひろしの諸君が私が出席し、酒酌みかはしつゝ柳談に花を咲かせ盡きぬ名残りを惜しみつゝ他日を期して別れ、東京へ行くひろし氏が又一人減り、一行四人は九時二分の列車で山中温泉に向ひよしのや旅館に到着き、男ばかりの家族温泉で旅の垢を疲れを流しながら、湯の中で又柳談を聞はす、我々が川柳を湯の中まで持ち込んださ笑はないでほしい。湯から出るさ左りの黨の三人は私に酒々々酒を請求される。仕方がないので女中に酒を命じて先に失禮して寝て了つたが、朝の二時三時までメートルをあけられたらしい。皆んなが寢床から起き出られたのは正午過ぎ、疲れてゐるさけ云へ、此の朝寢坊には私は病氣でも起さ

れたのではなからうかさ心配になり、一々起して廻るさ、皆んな無事、大きな欠伸をして起きて來られたのでヤツト安心、午後一時に朝食兼の午食を食べ路耶先生は朝酒いや午酒で陶然なられ一句を畫帳に残されました(ししは湯女のこゝです)

ししも打たずによしのやの晝

それより山代温泉に向ひ、粟津温泉を見物し終つた頃には夕暗が街を包んでゐた、腹は空ろし寒さは身に沁びでくる。始めは萬よし君を音頭取りにして軍歌「道は六百八十里」を歌ひながら練り歩いてゐるが、到々空腹に堪へずかしわ屋へ飛びこんだが火が無い、一同體操をやつたり、早の周圍を駈足で走つて暖をさる。萬よし君ついに麥酒瓶を蹴飛ばして割つて了ふ。時計を見るさ、七時に間がない今から走れば七時十五分の列車に間に合ふさ私が言ふさ皆んなは、それに乗り遅れては一大事さ註文を取消して彌次喜多式に逃げ出して來たのは今も一つ話になつて居るが、萬よし君は「向ふは何も損をしてをれへんし、二柳子君は早ふ歸るし、我々は福井がこれで見られし……」といつて居た。私は粟津驛で皆んなミ浪さん武夫さんの別れをして東に向つたが、西へ歸られた三君の其後の活躍振りはまだ聞かないが、嚙面白いきこがあつたであらう。

募

集

句

嘘

村田周魚選

川柳家の戸籍調べ

□ 係 ひろし生

(一) 姓名 (二) 雅號 (三) 別號 (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 職業 (七) 好きな句 (八) 好きなタイプの女 (九) 自信の句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配遇者の有無 (一二) 嫌ひなもの (一三) 川柳に手を染めた年月
お馴染の戸籍調べを引きつゞき 掲載致します。御照會申した向きは左記へ御返事下さい。

大阪市南区安堂寺橋西詰 安井寛宛

(172) 塚越迷亭

(一) 塚越正光 (二) 迷亭 (三) 南船二其他澤山 (四) 大阪市西區土佐堀船町二四 (五) 明治二六、三、八 (六) 新聞記者 (七) 多過ぎて困る (八) ただ女では困る妻と戀人は別だから (九) いづれ何集に輯める (一〇) これも多過ぎて困る (一一) いまだに獨身 (一二) 浪花節に茄子のおつけ (一三) 自分て川柳だなと思へるのは大正九年以降

(173) 本田柳一路

(一) 本田太一郎 (二) 柳一路 (三) 魔古十矢 (四) 石川縣小松町ネコ橋 (五) 明治三一、八、八 (六) 書籍、文具、運動具、化粧品、雜貨 (七) 大きな事實子が死んでる路郎

真梯子羨敵な嘘が浮んだり
また嘘と思ふが弱い親心
また嘘を言はねばならぬ親の前
斷りの嘘へ女房の合はす罪
考へて歸つた嘘を言ひそね
ひがんでる丁稚序に嘘を云ひ
山菓子嘘の名刺で取られてる
兄は又指切したを反古にする
來て見れば女房もあり子まで
もう嘘がきかなくなつて酒を呑み
戀人へ少しの嘘が氣にもなり
襟替はほんに嘘のつける頃
嘘を言ふ程に商賣馴れて来る
もうにで終ひく、香具師は實
嘘ついて出て看板に突きあたり
嘘泣きをする妹にくらしさ
嘘つけに刑事アツサリやつて
嘘ですと言つた女中は首になり
嘘までも本當にして惚れて居る
見にくい嘘を旦那は承知する
淋しさは女房へ嘘の要らぬ年

銀砂子 照葉 彩秋 風鈴 一舟 雷相 如水 阿々子 光路 冷笑 幸代糸 梓雨 水聲 鮎美 新水 幸泉 榮作 琴人 綠之助 三笑

其の嘘が大嫌だが嘘が出る
嘘にでもよく言はれた老い愚痴
説教へ和尚は嘘をたんご交ぜ
嘘と嘘いつのまにやら惚れて
嫁が來てから嘘の日が多くなり
虚一つ言ひ得ぬでこの惱み
境遇がさうく嘘にして仕舞
い、女中嘘を承知で禮を云ひ
氣付かれた嘘は淋しく笑ふだけ
眞剣に嘘を聽かれて怖くなり
嘘らしい顔にされてる若旦那
きつさか言はれて嘘が怖く
嫁の氣もくまに嘘を付け加へ
母親の嘘に今夜の膳もすみ
女房に承知をさせる嘘の数
處生難女房漸く嘘に馴れ
姉サンの嘘に母さんよくかゝり
なめてゐた奴に一杯してやられ
立板に水奥さまの嘘が濟み
掛取へ嘘をつく程世帯馴れ
嘘ならは嘘でいゝさ惚れて

東狂子 泰平 無鐵砲 翠峯 青水 鐵洲 菊路 豚二郎 多聞 虛白 伴内 一笑 玉仙 春公子 美香 一蝶 桃妖子 柳哉 町二 穗渡子 多喜女

口車今日は島田に結つて来る
 嘘ついた顔が鏡へ寫る也
 嘘々さ指でさゝれる鼻のさき
 刑事部屋咄嗟の嘘を云つちまい
 下宿料すられましたへ又送れ
 嘘つけすまだ辨當の箱を提げ
 嘘も言ふ程に夜遊びなれている
 掛値なきいたしませぬこやは
 嘘で無い證據見付かる小抽斗
 八百屋から子守の嘘を聞かさ
 同 吐露樓

藏

製氷庫つるり／＼こはこばれる
 藏の戸は丁稚にあまる重さなり
 姑が藏一杯のせきばらひ
 無理だのに隣にまけぬ藏を立て
 何様も藏一棟に住んでをり
 禁煙の倉A Bで靜かなり
 藏の中丁稚映畫の聲を出し
 日本晴藏の二階も窓をあけ
 暫くはまつくらがりの藏の中
 藏にだけ陽が當つてゝ雀るる
 相場師にまうけたやゝ藏は立ち
 大川へ土藏を映す月さなり
 錠前がさびついてゐる神輿藏
 京 柳 秀 歌 三 衣通史 風柳坊 京 郎 柳 秀 歌 三 衣通史 風柳坊 京 郎

小便をするにも嘘で育てられ
 嘘でせうなきゝ本當に戀になり
 嘘吐きがおだてられてる書休
 電話口いつもの通り嘘を言ひ
 (佳)如才なく嘘を覺へた年期
 見へ透いた嘘に煙草の火を借
 嘘ついた奴に其後逢はぬなり
 眞劍になられて嘘を張り通し
 佛前へヤンワリ嘘を云ひに来る
 蒼梧樓 同 漫洒樓 同 高 峰 同 秋 風 與 詩 天 曼 平 京 郎

喜田飯山選

建廻す藏も社交の一つなり
 先代とちがつた型の藏を立て
 藏の鍵したか知らんさ寢て思ひ
 大風走れば藏の音になり
 二階から藏の映つた池が見え
 酒倉もならび菜種の花盛り
 新嫁に藏の勝手も教へてる
 思惑に外れて藏が廣うなり
 朝顔に大屋の藏が邪魔になり
 まだ米があるなと思ふ藏の窓
 内藏の返事が遠い暖簾越し
 高屏に素封家らしい藏を見せ
 出前持藏のある家まで遠し
 花 蝶 高 峰 柳 哉 菱 明 春 公 子 寂 郎 蒼 生 坊 秋 風 重 陽 子 一 笑 伴 内 虛 白 竹 木

先生「咳一つ聞えぬ中を天皇旗」劍花坊先生(八)「戸籍調べ」から此項タケ省く事を希望します(九)残念ながら……無しです(一〇)乗馬、寫眞、觀劇、讀書(一一)御座るますついでに……名前は美砂保と申す(一二)黄金でツラを張るヤツ(一三)昭和元年の暮

(一七) 越村加香

(一)越村松次(二)加香(四)大阪市東區備後町二丁目金子號内(五)明治卅六年一月三日(六)化粧品貿易業(七)云ひ過ぎでない句、尺持つて思案は暮し向きのこさ(光路)お元日座るところにすはらさ(路郎)(八)日本髪洋髪斷髪にてもよし派手にない女 世話女房式のスマートな女(九)未だ／＼出来ません(一〇)商賣、其他悠の深い程多い(一一)なし(一二)掛事勝負、愚痴(一三)萬よし様が先生です大正拾五年末

(一八) 下川紋十郎

(一)下川清次(二)紋十郎(三)定九郎、鐵之助(四)長崎市浪ノ平町二六柴崎宅(五)明治三十六年十月二十日(六)天下の浪人姉宅の食客(七)山ほきありますからきれを書いてよいかわかりません(八)どここなく品のある女せわすらりつゝして肉つきがよくて、モダンガールより日本さくさくの島田がすき(九)川ながるながる

あの藏がいつも映畫に使はれる 將兵
藏の中話をすればうたがはれ 翠峯
藏附き聞いて借手はにえきらず 泰平
藏の窓から三日月を見つけ出し 綠之助
家藏を取戻す氣で都に出 琴人
藏の中はつきり網目陽が動き 三次
抵當の噂に藏も朽ちて見ゆ 八
品切を丁稚藏からぎなつて來 幸泉
倉の戸がみんな開いてるうち 露斗
我藏のやうに新宅持つて來る 水聲
藏へ來て養子の心また變り 鮎美
土藏ちみ見せて水彩描きをはり 梢雨
大都會だん／＼藏の数がへり 吉朗

釣鐘



二柳子選

釣鐘を見續つて居る 二三人 衣通史
釣鐘の響きに 山を寒う下り 漫酒樓
釣鐘へ櫻の散るも 風情なり 秋三
ロケーション釣鐘堂の人だから 蒼梧樓
釣鐘へ洒落を續ける麗らかさ 其魚
釣鐘は落ちはせんかき念を押し 京郎
釣鐘へ先生の手が 屈くだけ 高峰
鐘撞いて戻れば秋刀魚煙を立て 町二
釣鐘をつき煩惱を消してゐる 菱明

嫁取に空の藏までぬりかへて 阿々子
黄昏が半分かゝる藏の窓 珍郎
平等を遂に失して藏を立て 雷相
喰止めた土藏も半ば崩れてる 太閣
藏の戸を岩戸のやうに子はあ 風鈴坊
奉公の始は藏でひまがいに 孤舟
藏の中刀をぬいて叱られる 町二
若旦那しようこそな／＼藏へ立ち 無鐵砲
寄附帳に指を折られる藏をもち 吐露樓
藏までの俵は赤い顔になり 觀月
後一つ思出せない藏の中 光路
藏の戸は昔ながらの音で開き 同山
(軸)母屋より藏のものは哀れなり

橋本二柳子共選
安井ひろし

釣鐘をついて番僧門を締め 美香
釣鐘に昔々の話なり 春公子
國寶の釣鐘古いだけであり 晃卓
ま／＼こもお寺の鐘で晝にする 虚白
釣鐘さ一生じみに暮してる 竹木
釣鐘へ世話人の名が残る 豚二郎
千貫もあるかき鐘へ觸つて見 鐵洲
釣鐘を舞妓に搗かす面白さ 翠峯
釣鐘へ歩こう會の札も見ゆ 泰平
釣鐘を小僧淋しくついてゐる 東狂子

自由をはこる様(一〇)マアヂヤン、讀書
カアフエーをかたつばしから食いあるく
此は是れもまだ若いせいでしょう(一一)
残念ながらまだです。今の所無妻主義の
考え(一二)へび、しりの長い女、でれ
／＼した男、たかぶる女、隣のいんきよ
うに、なまこ(一三)大正十三年八月平井
九笑宅に列會のあつた日狸連にはいる

(176) 水田 黄彩

(一)水田穠吉朗(二)黄彩(三)嵐爽鶴蓮坊
(以後要す) (四)播州加古川大川町三
(五)明治三十四年三月十八日(六)齒科醫
(七)最近の川柳雜誌より、疑ひは少しも
見えず妻の聲、座蒲團を足でなほして冷
わること、行末を女の襟に見出しぬ、母
の名は親仁の腕にしなびて居(古句)(八)
句日本髪、從順な可憐さ云ふ語に盡きる
女(九)日を経るに従つてきの句も嫌にな
つてしまします今出來た句を「新妻は昔
の戀を聞きたがり」嬉しさを簞笥の中へ
しまい込み(一〇)金さ暇さへあれば旅
行、園藝、讀書(一一)あり(一二)いわゆ
る新しい川柳、高慢な奴、職業婦人、蛇、
ババ、ママと呼ばして嬉んで居る臍抜け
(二三)去年の十月頃

眞似だけのつもり釣鐘と鳴り
 釣鐘は千年前の音であり
 破れ寺の釣鐘だけの音が冴へ
 釣鐘は打つ所だけのつややかさ
 方便の嘘へ釣鐘よくひびき
 釣鐘をついて番僧門をしめ
 鐘の音も末世の耳を素通りし
 先頭はもう釣鐘をついて居る
 釣鐘にふれてほく笑む旅の妻
 うららかさ鐘が鳴す奈良の晝
 須磨の鐘淡路へ渡るうららかさ
 釣鐘へ世話人だけが名を残し
 釣鐘の撞けばなるぞごぶら下り
 釣鐘は死んでるようにぶら下り
 省したその日の鐘のなつかし
 除夜の鐘めりこむように響くら
 大詰で釣鐘を見る天王寺
 墓のない父へ天王寺の鐘をつく
 釣鐘に談してみたいふところ手
 釣鐘に稻妻さがめられてゐる
 いたはりながら釣鐘堂のかげ
 釣鐘の響くあたりは暗からう
 釣鐘のそこへ忘れた魔法瓶
 (軸)たまくの早起き山の鐘

曼平
 春公子
 ひさし
 無鐵砲
 其象
 美香
 柳哉
 重陽子
 町二
 多聞
 琴人
 豚二郎
 緑之助
 雷相
 光路
 耕民
 太閣
 寂郎
 松郎
 同舟々
 同
 同
 ひろし

三六

大佛の鐘杉をぬけ杉をぬけ 五葉
だしぬけに鐘がなるのも旅の事 路郎
の二句はかなり有名である。こんどの應募句
は大半、類想かつ平凡で、前二句に勝るもの
を殆んどみない。

殊に「鳴らぬ天王寺の鐘」「清姫の道明寺」「團
体さ鐘」「ステッキさ鐘」「毛唐さ鐘」「國賢
の鐘」「釣鐘のつき賃」それらが説明的に表現
され何等の詩趣をもたぬ句が多かつた。
甚しいのに「釣鐘草」「提灯さ鐘」「なごい
ふのもあつた。」

自分としてはつめて、抜句したつもりであ
るがこの結果を得たのである。自分の不敏か
もしれない、妄薦の點は深くお詫びする。

然しかく多數の作句が殆んど類型的で、無造
作に作句され、研究の後がみえず、新味のな
いさいふ事は課題吟の弊ではないかと思ふ
だが、これはあながち課題制の罪ではなく、課
題に對する作者の態度も遊戲的である罪か
と考へる。いまだ少しまじめに、真に作句の練
磨、研究を意願として投句されるなら、釣鐘
に對しても、もつと外觀的でなく、内省的觀
察が出来る事と思ふ。

課題吟投句も 近作柳樽投句と同様の熱心さ
が欲しいと思ふ。(三四六)

(一四頁よりつゝく)

然しこういった境地は素りに我々が眞似る
べきものではないと共に、又其人の境地によ
つては歌ひ得ぬ表はし得ぬ感じだらうと思
ふ。現代の餘りに物質的、餘りに科學的な生
活に苦しめられ、壓まされて自然さか人情さ
かに對する純な味はひを求め得ぬ者には、こ
ういつた句を以て、大いに詩の藝術を獻げた
と思ふ。
松郎……陽のいるの「青き」が少し物足りな
いと思ふ。

春三……「青き」といふのは、寧ろ「黄なるさ
みしさ」といつた方がよくはないかと思つ
たが「青き」は色彩の事を客觀的に見たので
はなく、感覺的に陽の色をさう感じたので敢
て變へる要はないと思ひ返した。此句の様な
青年は十九世紀にはさ云ふ變に聞こゆる
が、少し前には随分あつたが、だんだん少な
くなつて、現代の青年は非常に妥協的になり
瞬間の樂しみに耽るここのみを考へ、こうし
た真い意味のセンチメンタルに没つてゐる
者が殆んど無くなつたさいふ事を感ずる。「啄
木」をぢかに見てゐる様な嬉しい氣がする。

路郎……今啄木さいふ話が出たが、僕は此句
から啄木を想像することは出来ないと思ふ。
此作家自身から言へば、此句はそれほど優れ
た句だとは思へない。「青きさみしさに」とい
ふ言葉の意味は、春三氏の言はれたのでよい
と思ふが、其境地は短歌や詩に於ては既に言
ひ古された境地である。偶ま川柳として咏ま
れた爲に、多少異色の感があるだけで推賞さ
れたに過ぎない(琴人・革郎記)

あれしらずに

美しくなる：

御代乃花

本舗 伊藤大一堂

發賣 高橋盛大堂

到る所の藥店化粧品店に販賣す



川柳の本質 (五)

田中辰二

輕快なうがち私と言ふ。上乘な川柳になるほき此の要素を十分になへてゐるからである。だがうがちも種々な段階があつて埋窟つほくなつたり下らぬ穿鑿に落ちてゆく川柳の價値の低落を來す事は云ふまでも無い。例へば

(柳樽 一〇)

は秦の始皇帝が

三百里餅をふらせる始皇帝

(同 一一)

三百里家を立てゝも雨にあひ

(同 一五)

の句にあるやうに三百里を覆壓する阿房宮を立てたから定めて内庭へ一里塚の榎を植つけたらうのうがちでやゝ穿鑿に落ちてる。

(柳樽 一二)

直ぐ針で釣つたは鯛のつくりなり
は太公望が鯛の半分即ち周の天下に用ゐられたさの穿鑿
手ばなをばいばらき童子かみはじめ
(拾遺 寶曆)

は羅生門で渡邊綱に片腕さられた茨木童子が片手なくなつたので手鼻をかんだらうの穿鑿

そげ切が二十うざんが二十七

(柳樽 九)

明店の札諸所へ張る十四日

(同 一一)

大手が二十四からめ手が二十三

(同 一二)

は四十七士の穿鑿句

孝よりも忠義は二十三多し

(同 三三)

忠孝は七十一が手本なり

(同 四八)

は二十四孝と四十七士

首一つ九十四眼でにらみつけ

(柳樽 四七)

二八そば七百八十のはらい

(同 三四)

は四十七士の眼の顔や四十八杯の二八蕎麥の代價の穿鑿である
二八蕎麥は一杯十六文、四六錢ださ九六百で九十六文が百文に通用するため六杯の代が百文、四十二杯の代が七百元、残りの五杯が八十文、合せて四十七杯代が七百八十になる云ふ下ら

ぬ穿鑿である。

四十八文字で京都も江戸も降り

(柳樽 三五)

は柳樽十五篇にある

なご十七をんなは三十一

のつまり其角の十七文字の雨乞の句さ小町の三十一文字の雨乞

の歌の總和。

七月の八日玄宗頭痛する

(柳樽 一二)

八日には楊國忠へ加憎なり

(同 一三)

は玄宗皇帝と楊貴妃の情事をよんだ白樂天の長恨歌の「七月七

日長生殿、夜半無人私語時……」の結果の穿鑿

(柳樽 四〇)

一國に三本あての尻つ尾なり

(同 四〇)

は天竺・唐土・日本を騒がした金毛九尾の狐、戯曲の玉藻前の

尾の穿鑿

射落す十二支四匹いごみ合ひ

(柳樽 四四)

寅巳申四つ目に當る猪の早太

(同 五四)

嗣は七ツ目しり尾は四目十目

(同 三五)

は頼政の射落した鶴か猿寅蛇からなつてゐるさの俗説に猪早太

の猿々持ちこんで穿鑿だてたもの、百人一首あたりの穿鑿にな

る

九十九は古歌で一首は新しい

(柳樽 二二)

は同二十一篇の「九十九はわらみ一首は考へる」の俗したも

ので小倉百人一首の撰者定家の歌がその中に一首入つてゐるか

らの句案

百人で九十九人は蛇におぢ

(柳樽 一三)

は三十二篇の「蟬丸は見ねん見ねんさなき給ふ」の蟬丸が盲目で蛇におぢなかつたが他は皆目明きだつたからさの穿鑿

(柳樽 一九)

百人の中に目あかし一人居るは例の朝起の呪の「ぼのふ」明石の浦の朝なぎに鳥かくれゆく船をしぞ思ふ」と語んだといふ柿本人麿か百人一首の中に含まれてゐるからで

百人の中へ一聲ほさゝぎす

(柳樽 九)

時鳥聞いたは後徳大寺なり

(同 二二同 二四)

百へ入れたのは歎きりなごでなし

(同 二七)

鶯のまゝ子を一羽集に入れ

(同 二九)

ほさゝぎすしかも左のおさぎよみ

(同 三一)

一聲は月にのこして集に入り

(同 四〇)

一聲は時雨の空のほさゝぎす

(同 四二)

は百人一首中に時鳥をよんだのは後徳大寺だけださのうがち

(柳樽 一三)

定家の門に鶯ないてゐる

(同 三二)

鶯は時雨のせんを洩れてなき

(同 三八)

百人ながら鶯に氣がつかず

(同 三八)

は鶯の歌が百人一首には一つも無いさのうがち

(柳樽 三六)

喰ふ事が先づ第一定家撰り

(同 二八)

は「秋の田の」が第一に選まれたさの句案

(同 二八)

秋ぬれた衣を夏の山で干しは「秋の田の」に欠いで持統帝の御製があるから

(同 三七)

は喜撰法師のわが庵はの歌か阿部仲磨の「三笠の山に出でし月」さ小町の「花の色は」さの歌の間に介在して居るさの穿鑿。

(以下次號)

加古川の春

庄 萬 ぶ し

四〇

四月一日、吟行日和の、播磨平野を縫ふて我々一行を乗せた汽車が加古川驛に着いたのは十時過ぎ支部からは黄彩、千苦樂、大雲、梅更、泰山、洛陽、小公の諸君が歓迎へて下さる。寫眞でお馴染み見へて、路郎先生ですか、や、二柳子さんひろし君、かほるさん、萬よし君、先を越される。二臺の自動車に分乗して尾上神社に着いた時分には もうすつかり十年舊知の如き間柄になつて居た。

靈松はステッキの先にかすむなり

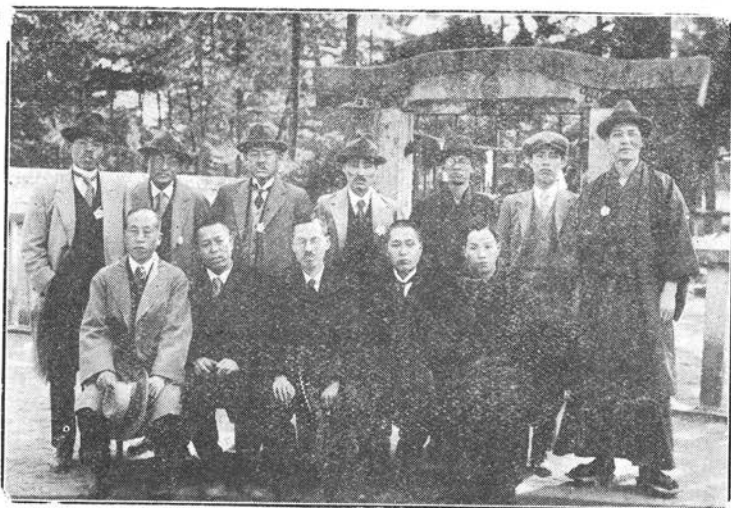
相生の松を背景に、散策中の新婚らしい夫婦を眺めながらレンズの人さなる突如撮影を見物して居た子供等の一人がワ

アミ泣き出した何事が起つたのかと思へば松の枯木の上にひろし君が置いてをいた例の大きな赤袍が子供の脊中に落ちかかり、動けば落ちるし、ぢつとしては居れず、斯くては泣き出したものさ判明一同腹を抱へて大笑ひ、謠曲に戯曲に名も高い尉と姥の高砂の松を訪ね、石の寶殿に向つて自動車を走らす、日本にもこんな狭い道が存在するかと思ふやうな根性惡のやうな曲りくねつた田圃道を縫ふて走る、時々曲り角で十年も壽命を縮める思ひをし、私は年甲斐もなく思はず知らず黄色な聲を連發する。

石器で造り上げた寶殿の石宮に電氣で

石を切つて居る眼下の工事は、三千年の日本工業史を見せた面白い對照である。石の寶殿の繪馬堂に立しは製紙に毛織に工業都市としての加古川の發展振りが遙か向ふに展開され將來の殷賑を想はせられる、通り合せの青年團一隊に前後して會根の松に向ふ。菅公手植の松は長い枝が八方へ延び榮ゐて、大きな笠の様になつてゐる、蓋し播州名所の隨一であらう晴れを待つ間に菅公は松を植へ更に自動車で加古川町へ歸る。加古川の長橋を渡れば、市區改正の出來た砥のやうな大道路がドライブを氣持よくさせる、驛前の會場に着いたのが四時過ぎ奥

きる人達はたゞへ行きつまつても、決して悲観せず、一層精進するから更に一段



于柳二・しよ萬・耶路・しろひ・るほか　りよ右てつ向列前
更梅・陽洛・樂苦千・彩黄・雲大・公十・山泰　りよ右てつ向列後

の進境を句の上に示してゐる。今日自動車の中で感じたことであるが、あの曲りくねつた狭い道で、自動車家が家へ突きたりさうでもそこまで進めば更に道が展けるのと同じであるからうますに努力されたい」といふやうなことを話され席題『女』の披露がすんで驛へ出たのは九時過ぎであつた。加古川支部同人各位が我々一行を飽くまで歓待して下さつた御好意を列車の中で語り合ひながらお土産に頂いたお菓子の蓋を開ければ『歓迎加古川支部』と浮出した特製の蒸し菓子であつたのに苦心のほぎも思はれ一層感謝の念を深ふした。

女

路郎

結局はわからなくなる女の氣
輕業を見て來て母の氣のかわり
年ごろの笑ひころけてから返事
ひざへ手をやつて女は横を向き
わたしですか盃を受けてゐる
女ですものさ夫にさかううて
女とは思へど腹のたちもする
女からきけば無理ごも思はれず
膝頭すゝめてくるも女なり
滿座の中で女から名を呼ばれ

路 郎 選
黃彩
千苦樂
萬よし
かほる
二柳子
ひろし
同
同
同

古句質疑

蛭子省 二

橋大工茶飯を焚いて禮に呼び

神戶 凡 天

橋大工を招待する方でしょう。商人生業（せうぎょう）（鑑寶曆版）に「大黒天は福の神なり、橋板にて作るがよし、これは人の足の下に住む心にて、身を慎み少しも高ぶらず。頭巾はうへより押へる心。上まぶたをあつく作るは、下を見て上を見ぬころ。米二俵ならで持たぬは足る事をしるなり。完爾々々笑ふは人愛敬の心。分限よく知恵かしこくても、かくれ簀かくれ笠に包んで。人に見せぬやうに慎み。潜上のころなく、黒米飯を食して客をたしなみ、打出の小槌は無油斷手を働かせ持出

し。袋は持たるものを片時も放さぬ用心（ようしん）と思ひて信ずべし」類吟を舉げる。

甲子に上座へなほす橋大工
切り端へ三の字しるす橋大工
佛師屋は橋板などを笑はせる
橋板は佛師の見世に笑つて
甲子によばれますよ橋大工

三枚目の橋板で刻むたものである「町人義」に「世俗に橋の板を以て造ら處の大黒は靈驗ありといふは。橋は通じがたき所を通じて廣く萬民を渡し。日夜踏むこきたわす。その板を以て造れるは是萬人に譲り諸人の膝下にありても終に身をたて用を達せんと思ふ心也。此こそはりをわきまへなば橋板にあらずとも有なん。去神道者のいへるは世に信仰する大黒の像は日本大國神の像にして佛説にいへる大黒天神といへるにはあらず」

筆二本岩と松とに捨てて置き

（二九へん）

神戶 凡 天

絶景のため詩人畫家が恍惚として筆を捨

てた云ふ語柄は餘り耳にするので却て忘れてしまふ。松の方は明かであるが岩の方を思ひ出しません。その内に探して追補します。或は岩は山を意味したものではなからうか。筆捨山は奇巖重疊と聽く。假りに夫れさして類句を舉げて置ます。

許六の鎌倉の賦並序に「能見堂には八景總詠の詩を見る、照平の松、筆捨の松、金澤の文庫といふは稱名寺にあつて今はなし」

萬木にすぐれて筆をうつちやらせ書いたより捨てたで松の名が高し
繪師の筆拾ふて歸る松葉かき
筆すてた松で筆とる旅日記
なけたのも捨てたも筆の名が高し
投げたは弘法の投筆。霸旅漫録に「去る八日大津より乗船して矢走に着きぬ、しかれどもむなし、船底に潜み居て、湖水を賞するによしなし。九日の朝鈴鹿山を過て坂の下に出る。山中に狩野古法眼が筆捨山といふあり。山は高からず石山に

て小松生しけれり。武州金澤にも狩野の筆捨松さいふあり、又紀州にも同名の松あり、いにしへは畫家もいさ拙かりしにや。うつしがたきさいふ山にもあらずかし。(後人山水に名をまふけるこそこれらは却つて雅ならず覺ゆ)

すてられて山にもなくか
ふてつむし

さ出て居る。關の附近の名勝 驛から西北三十二町街道に沿ふ。

筆捨てた山に一刷毛 春がすみ
古法眼かかぬか山に筆をすて
山の名になるとは知らず筆をすて
餘事ではあるが耶馬溪には山陽の擲筆峰があつたようだ。南總里見八大傳に「筆捨の松のふる葉も言の葉も子等にをしへてかゝするぞ憂き」さあつたま記憶する幽遠隨筆に筆捨山として「今も猶筆捨山やつくつくし」さうも古川柳の岩に疑問があつてならぬ。

今川も酒のつぎには壺のこと

石川縣 山本 彰

今川は今川了俊對愚息仲秋制詞條々の事
酒宴勞賃を戒めた一ヶ條がある。壺はト
バク用具。此の制詞は徳川時代には實語
致なきこと。子供は教へられたもので、今
の青年には縁はなかつた。私なごある事
情で辛うじて學ばせられた。

小僧は今川和尚はいろはなり
「いろは」茶屋の事墮落僧である。

丁稚の夜舟今川を漕いでゐる
狂句である。悪い洒落のものには

愚息さら今川町の伯父をよひ

一、不知文道、而武道終不得勝利事、

一、好鵝鷹逍遙、樂無益殺生事

一、小過之輩、遂糾明令行死罪事

一、大科之輩、爲最負之沙汰致有免事

一、貧民令沒倒神社極榮事

一、先祖之山莊寺塔以下破壞莊私宅事

一、君父之重恩令忘却狠忠孝事

一、輕公務重私用不恐天道勤事

一、不辯臣卜善惡賞罰不正事

一、我知知臣卜勤君父可爲同前事

一、企過亂兩說以他人愁樂身事

一、不知身分限或過分或不足事

一、先他人之理致謫望勢權威事

一、嫌賢臣愛佞人致非分沙汰事

一、不可羨非道而富不可輕正路而衰事

一、長酒宴遊興勞賃忘家職事

一、迷已利根就萬端嘲他人事

一、人來則構虛病不能對面事

一、好獨味不能施人隱居事

一、出家沙門尤致尊崇可正禮義事

一、於分國立諸關令煩往還旅人事

一、武具衣裝已過分而臣下見苦事

一、不辯貴賤因果之道理住安樂事

右が條々で續いて説明があるけれども長

から省略する、仍壁書如件、永享元

年九月十六日さある。

吉原は武道勝利を得ざる事

一つ文道を知らず妾が兄

先祖の山莊を息子らりにする

等古句には可なり利用されし居るのを見

ても一般的のものであつた事がわかる。

今川貞世千軍萬馬の後剃髪して了俊言

ふ、故實に通じて居た。今川大双紙難太

平記言塵抄等の書が多い。

文政五年高井蘭山著女古狀揃園生竹の

内には今川に準へて自を禁むる制詞の條

々々云ふのがあつて婦人に訓めてゐる。



車中より

(金澤川柳大會印象記)

安井 寛

路郎先生机下

十五日の夜北陸川柳大會の後皆様にお別れして一夜を金澤の友人W氏と夜の二時まで語り明し。十六日の夜行で東上の客となりました。汽車は博覽會行の人々で満員です。今朝輕井澤附近でめざめ、横川驛の櫻の満開に人なき里にも自然の恵みの偉大さを感じました。只今東京まではまだ二三時間ある上川の平原を列車は進んでをります。つれづれのまゝに十五日川柳大會の印象でも書いてみることにします。安川久流美氏のあの偉大な長身と比賀壽み三君の若々しい才氣のある聲にはすつかりほれほれとしました。森田氏の熱のある講演は大阪の人々にもきか

せてあげたいものでした。

川柳界にも森田氏のような先覺者のある事、川柳をあれだけに認識されてゐる態度には敬服の他ありません。次に先生のお話でしたがあれは惜しいところで時間を切りつめられたので残念でした。

地方の人たちに話さなければならぬ事のうちに、是非共數へたかつたのは、上手なうまい句を作ろうとせぬ事ではないかと思ふのです。無論うまい句をつくり得るように努力する事は當然だが、うまい句、上手な句、第一で進む事が川柳をして型にはまつた。フレッツシュさのないものにしてしまふのではないかと考へます。

下手な句でもよい、眞の自己の心を表現するところに新らしい、よき川柳が生れてくるのではないかと思ひます。「一句を残せ」と申された先生の氣持も「うまい句を残すよりも」「これが自分の句ですー」はつきり云ひ得る、まことに心の表はれた句を要求されて居るのだと思ふのです。そのためにはまづ點取競争を排さなければなりません。自分の至寶とも云ふべき句は何點などご決定さるゝべきではないでせう。また點取競争の排斥によつて惡達者、お座なり川柳の排撃も出來ませう。作句時間の制限も窮蹙でなくなるご考へます。

阪神地方の出席者はあまりに馳け足的な作句強制には面喰つたやうでした。これらも凡て北陸川柳家達の熱心の結果である事はよくわかいますが、またふだんの例會では、あんなでもないごはき、ましたが、句を作るよりも、句を生む事に努めたいと思ひます。

然しこの大會は愉快な會でした。それ北陸川柳家諸君が進取の人格、紳士的な人達の集りで、來會者の人格から湧く温み味が、あの櫻花にも似て、詩の三昧境にみちびいたのでせう。

私は先生と共に北陸の柳界の多幸を祈りたいと思ひます。(四月十七日汽車中にて)



各地柳壇

川柳 四月例会

四月七日午後六時半から日本橋俱樂部で本社例会を開催した。

春宵の一刻を價千金の作句に精進した。席上路郎主幹から「實観に即した句と平凡な類想句について」講話があつた。田邊の楓林氏も來會あり、和氣露々裡に散會した(ひろし記)

▲參會者 路郎、松郎、映車、養魚、六齋、露斗、突支坊、吞陽、貴山、湘里、豐次郎、孤舟、幸泉、ちるる、虛白、二竹、屏三呂、萩慶、香淵、廻天童、文蝶、笹舟、南天、曼平、蒼梧樓、惡源太、武藏坊、翠峯、不愁、三次、加香、琴人、かほろ、柳骨、萬よし、亂耽、二南、素人、武子、ひろし、革郎、松壽、源坊、翠川、鮎美、石竹、觀月、賀名芽、里十九、青影子、鳴玉、嶺月、紋太、京三、閑路、迷亭、楓林、二柳子

兼題 借金 路郎選

借金に娘の顔が札に見え
借金の中に女給の派手な事
借金雨の中をば歸るなり
借金を手柄の様に聞かされる
方針を替へて借金して見る氣
借金さうさく借らず戻つて來
借金もようせず不運ばかり云ひ
質さ云ふ便利なものを知り初め
借金を残して名妓惜まれる
借金の今日もくたぶれ切つて寝る
おづ／＼さ云へば氣安く貸さぬ
借金のかたにさ大刀さげてくる
借金で月に一度は逃げまはり
金借にたまじ肩書邪覺になり
借金にせめて子の背が伸びて行き
金高を云へさ伯父さん貸す氣なり

借りた金貰つたやうに喜んで
借金でれれ衣を着た獨り者
借金の今日は和服で座らされ
美しい妓の借金はいなづかれ
借金へ男さしての口を利き
借金は別に遊びに來いさ云ふ
借金の言隙で子が真似る
腕組みをする借金はいづらなし
借金もうんさあるわさ姉藝者
借金の首にラツコ巻ひてゐる
いまはまで息子借金知らぬなり
若夫婦國で借金するさきめ
借金は借金カラーを換へて出る
氣をかへて借金取りが世辭を云ひ
此の俺をさこを見込んで貸して
借金も輕るソファアに身をもたせ
同情金借金も濟み子も育ち
借金はいだまつて妻に爛をさせ
金借つた伯父が大きく見ゆるなり
借金のかへり突つた月を見る
借金のかへれば子等は眠つてゐ
養生葉ははず借金だけ残り
借金に妻へ遠慮の日は續き
借る迄の世間話は身が入らず
今借りて來たさこは見ねぬ段梯子
借金の話火鉢が邪覺になり
借金をこさへ老舗も賣らず出る
値を聞けばこれも借金でさ云ふ
本當にせぬ借金に困つて居
金借りに行つて哲學ばかり聞き
金策つかず夜夜の譯へ来る

路郎 松壽 柳骨 二美 鮎南 燕柳 不愁 蒼梧樓 萩慶 狸仙 武藏坊 笹舟 武子 賀名芽 翠川 柳骨 青影子 多聞 炭車 同貴山 同嶺月 同紋太 同亂耽 同秋

借金で本家の方が潰れたり里へまた嘘を言はして借りやりに應揚に出て借金を踏み倒し心よくな金借りたが手を切られ此の上は意地で彼女へ金を借り銀行が開いて云罷立たぬなり借金はないかさ母はまづ訊ね此の次もまた借りられる様に借り借金の桁が三ツ四ツ違ふなり貸せなぞ云々呉れと云へる云ふ借りられぬ時を途々考へる(軸)借金でくたした上踊の灯
席題 唐辛子 松郎 選
唐辛子一粒毎へ夜店の灯
唐辛子真赤になつて天高し
三錢のれうちがわがる唐辛子
唐辛子たんの隅で瘦せてゆき
唐辛子は辛いものだて閑遊會
唐辛子舌にさはつて心得る
唐辛子頭の芯がかゆくなり
唐辛子頭散しき膳の唐辛子
頑固一徹貧しき膳の唐辛子
唐辛子馬鹿な男の舌の先き
唐辛子貴公はよつぽいける口
御察はんの世帯上手の唐辛子
父さんの好き七味もちやんさ出し
二はい目のに要らぬさながら
姑の心になつた唐辛子
唐辛子はしりもさから断はられ
異端者のように置かれた唐辛子

唐辛子のような氣持で生きて居る(軸)先生を抹殺したる唐辛子
席題 買喰ひ 紋太 選
買喰ひ喰ふてしまふて戻つて來
買喰ひのよい買喰ひを母が知り
要領のよい買喰ひを母が知り
買喰ひに無邪氣な怒が充たされて
お隣りの子の買喰ひに承知せず
買喰ひをしたさと言はす宵の膳
買喰ひにいつもの犬がついてゐる
買喰ひの残りを一つ藏で喰ひ
買喰ひの出來た昔を戀しがり
買喰ひへ来たい人が這入つて來
親且邦買喰ひるを見逃さず
買喰ひを叱りやつぱり錢をやり
買喰ひ喰ひの事まで先生聞かされる
買喰ひをしてゐるネーとさわれる
買喰ひの口笛なごつてごまかせず
買喰ひの財布なごつて空になり
なべやきの湯氣に買喰ひなれて居る
買喰ひは致させませぬ暮しなり
買喰ひをさせて具日の忙がしく
しつけ取りながら買喰ひをいし
(人)買喰ひに自動車をはけ馬をよけ
(地)買喰ひをさすな亭主服をぬぎ
(天)買喰ひと貯金と別にせがまれる
(軸)買喰ひに殘りの錢を數へさき
席題 終電 五 選
終電が着くさうぞんや外を見る
終電を聞タクさゆくばかりなり
終電でこれはのの人に逢ひ

終電に車掌靴を覗いてる終電に落語を眞面目な顔でゐる
つりかわの皆さんがゆれる終電車
終電が通つたらしい茶屋で聞き
終電車素顔の女疲れて聞き
終電を待つ客欠伸うつり合ひ
終電を決めて主張を曲げぬなり
終電車庫の屋根が迫るなり
終電へ車庫の屋根が迫るなり
終電の中で何時もの顔に會ひ
終電へ眠かに来る女連れ
終電に出口まごつく親子づれ
威勢よく送り込まれた終電車
終電の車掌もあくびがみころし
終電は只ガランとしてよく走り
歸つた事歸りました終電車
白首がよく喋つてる終電車
むりやりに終電まで止められ
終電にあつた三分の走りやう
終電へ見送る女酔ふて居る
終電の後ひつそり動く影
終電車通過のベルが鳴る
終電で車掌は客を起す役
終電を下りて松原雨になり
終電にもこの一人になつて乗り
終電で要らざる世話をやく男
終電へ夕刊が未だ賣れ残り
終電を出して寒な顔が寄ひ
終電はうささせぬ走りやう
終電の車掌見せつけられてゐる

炭車 炭美 貼天 翠川 不惹 虛よ 萬よし 青影 素人 革郎 陽亭 武藏 里 同 湘 陽 幸泉 文蝶 同 觀月 同 亂耽 同 二南 同 春彦 同 源坊

三等車國のなまじりもあからさま
三等車葉種の花を子に教へ
三等車を窓のせてる三等車
三等車みんな漫畫のやうになり
三等車驚く程に掃き集め
三等車をんなじ足を二度踏ぎ
三等車後へ走らねばならず
飛びく場に見つかつた三等車
ごちらへさすぐちかづくも三等車
驛辨の眞直ぐに來る三等車
三等車車掌あつさり拔けるなり
母親を車かゝ頼んだ三等車
三等車乗るが早いか話しかけ
二等車五錢落してゐたへる
走られた上混んでゐる三等車
三等車夫婦に乘つて愉快なり
三等車切符の知れぬ騒ぎなり
三等車も拔けて咬へ揚子なり
無作法に親しみのある三等車
眼がさめて辨當を買ふ三等車
三等車夢からさめたやうに降り
三等車こゝでもお茶を買ひそこ
三等に海を見飽いた家出なり
三等車涙をのせて走るなり
三等車滿州へさぶつもありなり
三等車W・Cがまだあかず
縋帯をうらめしく見る打撲傷
片目だけ出す縋帯のむつかしさ
縋帯へ戀人と言ふつきなり
縋帯の足投出して糸を巻き
縋帯をうらめしく見る打撲傷
千草人年

重陽子
揚花
一狂
龍水
紋太
素生
ひろし
二南
同
萬よし
松郎
嶺月
同
城雨郎
同
迷亭
同
路郎
同
亂耽
同
同
同
太選
嶺月
亂耽
草人
千年

繡帶によだ血が滲びまゝ戻り
諸員車繡帶の手を持てあまじ
繡帶が山の如くに解つてかれ
繡帶を父に任せて眼をつむり
見せる氣で無い繡帶を尋られ
女ですものへ繡帶遠慮する
繡帶へ膽をつぶした母がある
(人)繡帶を更る時だけ痛みます
(地)繡帶にあんかんとしてゐた
(軸)繡帶を見詰る人さ云ふものは
(軸)繡帶に鞘をつめて選手ある

再 會 迷 亭 選

ドライブをさゝめ十年振の友
再會のごつちもかこつ事ばかり
再會のその夜困つた工面先
再會に世帯やつれを慰める
再會に矢つ張り久留米耕て居
再會は男になれとさ五圓札
再會に世帯の事も少し聞き
再會の見すばらしさをあげます
この駒齒だつたを齒醫師知つて
又逢ふたなあ居酒屋の差向ひ
百貨店又會つたなさ笑ひ合ひ
再會二人へまはる煽風機
(人)御主人の用事に行き巡り會ひ
(地)再會の懐しく見る座り癖
(天)その時の話に二人さゝ觸れず

若 返 互 選

妾見に時間がかかる若返り
若返る母に淋しい日が續き
宴會でおつさん一つ若返り

山都 重陽子 素生
龍水 素生
萬よし
東洋鬼
亂取
二南
於兒二
松郎
同
紋太

若返りひらい所で子に出逢ひ
 若返り信心だけは怠らず
 若返りかし腕がだるいな
 若返り法と社長の蓄妾論
 若返り氣で温泉に通つて
 若返り法はこれさ猪口をあ
 江戸は春「藤十郎の戀」が
 十七を運れて恥づかしさを
 若返りたい程今は金を貯め
 若返り髭へ手をやる癖があ
 若返り妻へ十産を買つて
 上京の度若返るわけがあり
 忠臣
 忠臣の筆今に尙かすれて居
 忠臣の下郎だけに認められ
 忠臣の笑顔少なく生れつき
 忠臣の目に様々な女なり
 忠臣のおなら笑ふに笑はれ
 忠臣と忠臣笛を合はして居
 忠臣へ夜はじん／＼更けてゆ
 あすまいを正し忠臣よく笑
 忠臣と君と白髪を比べあひ
 忠臣はいつも社狂着てるや
 忠臣の墓の近くで風を上げ
 忠臣を忘れた花の人出なり
 忠臣へ頭の古い評が立ち
 忠臣の氣性を見え落ちる
 天にが／＼忠臣は座を外し
 輔群衆の中に忠臣つばを飲
 兄
 こみ入つた話に兄も呼ばれて居
 路選
 東洋鬼
 嶺月
 舟々
 清公子
 於兔二
 迷亭
 一狂
 草人
 柳水
 むつみ
 同
 二南
 東洋鬼
 むつみ
 同
 迷亭
 嶺月
 路選
 松郎
 路選
 二南

兄さ云ふつこめ紋附着せられる
兄として腕時計買ふてやり
父死んで兄はおもみを附けたがり
兄の着て履履書を持つて出る
同じ兄でも隣りを羨んで
兵隊の兄を末の子婿とせす
獨立の氣があり兄は本ばかり
友達もないのか兄は本ばかり
海軍の兄来て夜も更けてゆく
三味線を習ふ兄には容れられず
弟にも兄貴に懲りた通り懲り
家出した兄の氣持が今日わ
兄様さしての看護にあきらめて
兄さんの娶つてからを齒痒がり
職人がいやさは兄も知つてある
兄さんの通りをすれば母叱り
出世して歸り畑の兄に會ひ
不景氣は兄は何處にやつたやら
兄の年我が事ならで驚きぬ
ふるさとに暮して兄は名譽職
事毎に兄へ遠慮な母さなり
拾八貫未頼母とい兄を疲れ
系類の多い家庭に兄疲れ
兄の言ふ通りにすれば字がかすれ
兄はうつさ弟の才を眺めてゐ
何か書く兄の此頃よく怒り
氣嫌よく歸つた兄へ膳を出し
兄ちゃんに洗つてもるた足をみせ
角帯で歸つた兄をまぶしう見
惡心を兄さ云はさぬ氣で眺め
さささればならない兄も酒好き

眠聲 翠峯 虛白 南耕 陽喜亭 燕柳 志柳 黃彩 萬千代 一狂 迷亭 同 ひろし 迷亭 舟々 同 鮎美 霞香 松耶 素生 同 東洋鬼 亂就 琴人 草人 むつみ 揚花 黃彩 紋月 嶺月

兄さんも来てよと女給笑ふなり
兄の云ふ言葉が、癪な十八九
肝心の話へ兄が弱くなり
(人)大きい辛抱せよと兄の靴
(地)意見聞く様な氣持で兄と飲み
(天)失戀の兄へ濟まないも縫ひ
草人
平塚支那 創立句會 (神奈川縣)
兼題 火鉢 四月十四日夜 酒井駒人報
癪癪の跡を火鉢のふちで知る
くつた火鉢の火鉢吹いてゐる
まわされさばかり火鉢吹いてゐる
より／＼の協議がかこむ瀬戸火鉢
寄宿舎の火鉢かこんで國自慢
向き合つた火鉢の意見が合つてゑ
筋違ひ火鉢へ遠く本を讀み
客火鉢老舖と共に賣り出され
共
どしや降りには恥を捨てゑる
にくらしさ乾いた傘をまたぬらし
よい雨も三日と降ればぐちを言ひ
ビルデンク七階で知る 晝の雨
日曜の丁度其の雨が雨さなり
雨のもるさな家主は見て歸り
諦めて雨を朝から暮ですこし
共
花見には連れて行くぞと働かせ
羨やまれるように花見の酒の味
花の山嶺首のこまなぞもう忘れ
迷ひ子に櫻の花は散るばかり
共
於鬼二 二南 山都 東洋鬼 草人
ひでを 二南 山都 東洋鬼 草人

席題 女
色も香もせてかどづけ哀れなり
驛を出て女親は土産買ひ
親不孝しつゝ女と住んでゐる
長旅の土産女房のもまぢり
半襟が買ひたさ女見せてゐる
美知坊
川柳 糸屋町句會 (人阪)
維禱社 四月十一日夜 於樂樂館 川合舟々報
兼題 出展り ひろし氏選
鏝くべていつそ出展り氣がふさぎ
出展りの姉まゝ事の客さなり
出展りの朝寝に少しなれて来る
出展りは只母親へ泣くばかり
出展りは皆んなのあこで飯にする
出展りの箆箱は藏にしまはれる
出展つてからは母にも楯をつき
出展りは婦人雜誌へ寄稿もし
出展りの何か云へば日が過ぎ
出展りの氣分は髪を洗つて
あゝ云へばこゝ云ふ様な姉さなり
出展りの眼に 妹のよく肥り
出展りの眼にも疊の古びやう
出展りがあの日箆箱に傷をつけ
出展りは此頃豆乳飲んでゐる
出展の讀んで焼いて捨てるもの
出展りへ月日は遠慮なく流れ
出展りのたいた御飯にしが出来
嫂の下駄も出展り洗ふてゐる
ふだん着のまゝ出展りはつと来る
不自由のない出展りの淋しがる
せん太 千代二 娛鹿 二南 山都 東洋鬼 草人
千代二 娛鹿 二南 山都 東洋鬼 草人
赤城 同 武子 孤舟 白蝶 葉平 二竹 武藏坊 三笑 吉期 翠川 新水 萩鷹 蒼梧樓 陽喜亭 源坊 松耶 ひろし氏選

三月十七日 於木三居 同人

兩親の心配温度表になり

兩親はいけそんざいに片付け

不具の子へ皆残す氣の共稼

無理な父と素直な母を見比べる

親々の云ひ交したる仲なれど

親がある名乗りあはない親がある

兩親を引付けたい子のほしやき

兩親を聞はれ萬引眼がうるみ

ふた親が官舎にくらし閑に倦き

熱高く亡き兩親の夢を見る

その上の注射ふた親居たまらず

父が在はせし母が在はせし頃の傷

父が在はせし母が在はせし頃の傷

糸屋町小集 (大阪)

二月二十五日夜 川合舟々報

手土産

歩けばかなり遠い手土産

手土産を持たねばならぬきへ行き

近所まで来たに手土産見付からず

嘘ついて出る手土産は重たすぎ

手土産はまだそのまゝに聞惚れる

三月十四日夜

拵つて肩から懐覗くなり

屠殺場間近く牛の口動き

牛の顔は止まれるだけ止り

鼻唄に牛黙々さ歩くのみ

引はられても牛これ丈の歩きやう

素人居偶會 (於香里菅相塚)

同人

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

二選

松盛 琴人報

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

五選

脱稿へ黒猫一度鳴いてくれ

黒猫の欠伸に可愛い舌が見れ

戀に破れたいさし黒猫

背のびした黒猫やつさゆみだし

足もさし黒猫の眼が光るなり

黒猫を娘膝へはのせぬなり

かほる居偶會 (大阪)

三月廿一日

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

二日 醉

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

五四

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

のめどもつきぬ暮の孟 同
萬よし偶會(大阪) 萬よし報

三月十四日

張板

張板へ夫歸らぬ日向なり
張板へ思ひ出がある嬉しさよ
飛行機を見て張板を裏返し
張板の隣へ頼み畫の風呂呂
張板へ酒の御用を聞いてゐる
張板へいそぐ後家を立てゝある
腹立てた日を張板へきつい糊
張板へ新妻赤いしのばかり 萬よし

悟郎庵偶會(大阪)

三月十一日夜

悟郎報

白鶴見學の歸途悟郎庵に立寄られた諸氏と
それを聞きつけて來た閑路氏の九人が左記
の四題をものする。令妹を失はれた源坊氏の
爲めの「妹」を最後に別れたのは十一時過ぎ
でした。

得

得心

互

選

もう死ん氣義理の手前をウシ云ふ
得心はゆかぬがやめりや喰へぬなり
得心のそれでも涙こみ上げる
得心の漸ふ髪を撫ぜ付ける
得心はさした母に氣にかかり
母ちやんはれ災へ行くさうなづき
すつたんだでやつこ得心
得心の前にお金があるばかり
得心に両親あたま下げるこ
得心がいたか背を叩かれる

眠聲 源坊 毒仙 同 燕柳 同 彩秋 同 双葉子 同 悟郎

得心をせよとは僕を見下げてる
行 行列

互

同選

行列の半分踏切から走り
行列の通れるだけの道を開け
行列を上げて見てゐる許嫁
行列の中であつてまぐエキストラ
行列の時刻床屋は尋れられ
行列へあやしい雲かふいて來る
行列の中の一人がお辭儀をし
駕籠に聲あつて毛槍も風を入れ
行列の目ざす仇が只一人
行列へ夢青々こ五寸のび
行列は腰から下を見るばかり
行列の先に居るのは抜きたがり
行列のあまに醫者般疲れたり
行列へ言頑固に突き進み
行列へチトかち割が大きく
行列に立派な髭もまじつて
行列は又先頭へ聲をかけ
行列の皆んなまた馬の糞

眠聲

同選

今囀出るのを電話知らぬなり
眞實に口説に女囀をし
一人兒の囀をしても氣に懸り
待ち人は來ぬ辻占に囀出る
囀一ツ暫し手拭もつたまま
未だすまぬ話しに囀つくなり
強意見囀めが出て聞が抜ける
噓から噓る事にする長火鉢
(軸)又噓めへグリーン丸を取つて

眠聲

同選

噓めへ昨夜はすこし夜を更かし
妹

互

同選

机の人形までが妹に見え
妹のあるばツかりに友が増へ
姉を淋しからせる兄白し
妹は小學だけで飯を焚き
妹は味方につけて親を説き
妹さ母を置いて國を出る
妹の才は皆んなに惜しがられ
妹の呉れる鉛筆細いなり

電氣柳壇句報(大阪)

ひろし

選

一等のカップ明るいものに見る
一昔ふりかへり見る笑顔なり
寢てからの話に電氣明るすぎ
病床に命を刻む置時計
人間としての私服に腦みあり
一面の眞理まよく聞いてくれ
ピアノ等たいてこの世にうさぎ
赤裸々に女給個性をみせて壽計
飯事の一人がブルの眞似になり
元日さいふ子供座り方
未曾有の山火事に
九百町一紙にしてやつこ消へ
咽び入る喉を焚出し通りかね
今更に愛しますなご云へなり
爪の垢お前もそんなに淋しいか
生の母ふだん着て來て無言なり
口紅にめくつて夜の部屋になり
青い空青く見飽きて病み疲れ
捨てられた戀を椿へくちづける

同選 美南史 文英居 夢考 花情 同 籬楓 同 燕柳 同 休歩

同選 燕柳 同 雙葉子 同 源坊 同 毒仙 同 彩秋 同 悟郎 同 閑路



編輯後記

▲五月號の原稿の整理には實際苦しまされた。輻輳した原稿はどれも載せたい原稿ばかり、次號に割愛するに忍びないものが多かった。

▲神戸支部幹事庄萬よし氏は楊井二南氏と交代され、四月十三日神戸四宮神社で神戸支部川柳大會を開催盛會だった。

▲中島鐵洲氏が鳥取支部の幹事として御援助下さる事になりました、發展を祈ります。

▲加古川支部では近く柳諦「めだか」を印刷し發刊されるさうです。諸君の投句、漫文、小品の御寄稿を希望します。

▲加古川支部の御招待を受け四月一日路郎先生、二柳子、かほる、萬よし、ひろし、諸君が松の名所を見物し、大歡迎に感謝しつつ、歸られました。

▲四月十五日に金澤で開かれた金澤川柳大會に路郎先生、紋太二柳子、萬よし、ひろし、舟々赤城の諸氏が出席されました。來會者の方々の歡迎を皆な喜んで感謝してゐます。

▲平塚支部では川柳雜誌の宣傳ビラ數千枚を印刷されて宣傳して下さった、本社は深く感謝してゐます。尙

は四月十四日には創立句會を開かれ非常に盛會であつたさうです。

▲社友河南放馬、堀内靜雲の兩氏は今回退社されました。

▲芦城川柳社では柳諦「猫柳」一周年記念として大懸賞で「玩具」を募集されました。

▲篠川支部發展を期するために「聲」不二網選「勝」二匠選で四月廿五日締切りで募集された。

▲仁川支部幹事矢田右大臣氏が四月十一日に來阪路郎居を訪問路郎先生にセヒ朝鮮へ來て貰ひたいと言ふて行かれました。

▲川柳すゞめ吟社の創立三週年記念大會が五月七日午後五時から讀賣新聞社の講堂で開催さる

▲拍子木川柳社では四月一日から十一日まで神戸元町小橋屋吳服店で川柳漫畫展覽會を開かれた。

▲關本雅幽氏は四月四日九州方面へ旅行された。

▲二柳子氏は金澤の歸途石川縣鶴來町銀紙川柳社を訪問した。

▲社友三笑加香兩氏が社友同覽誌を始められ頗る好評です。

▲金澤から廻

つた安井ひろし君は四月十七日著京十八日岩崎柳路居に一泊同夜は千代二、美南史、仙湖氏など小集を開き同夜半まで柳路君と東京柳界の話など語りあひ大いに共鳴して來たこの事。

▲舟々赤城の兩君は金澤よりの歸途舟々君の郷里富山福光町に二泊歸途金澤の夜櫻を見物さる

▲螢ヶ池支部の熱心な作家で將來を囑目された山田壽慶氏は四月十日廿一歳で永眠されました深く哀悼致します。(革郎)

移轉

- ▲西原柳雨氏東京市外東中野桐ヶ谷一二六四に移轉
- ▲岩崎柳路氏は東京市外杉並町高圓寺八二三に移轉
- ▲辰巳雛楓氏は大阪港區魁町四丁目二四上田モト方に移轉
- ▲河村桃哉氏は大阪府豊能郡桑野村才田三五八ノ二に移轉
- ▲高須賀期舟氏は大阪此花區春日出中二丁目三に移轉
- ▲小川百雷氏は大阪市天下茶屋櫻通二丁目一七に移轉
- ▲中村無口氏は山口縣山口町古熊江川方に移轉

正誤

- ▲四月號粒々集中松郎氏の「句水舟に冬の名残りがたよへり」は「名残りかたよへり」の誤り。
- ▲四月號各地柳壇中「町内」の句「町内の事は女房に教へられ」夢路は開路の誤まり

投稿規定

- ▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。
- ▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」を封筒に朱記すること。
- ▼締切は嚴守されたし。
- ▼各地會報は清記のこと。
- ▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。
- ▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入のこと。

募 集

第五卷第七號課題

五月五日締切
(各題十句以内)

- ▼本職 淺井五葉選
- ▼砂 相元紋太選
- ▼晝寢 太田朝陽共選

第五卷第八號課題

六月五日締切
(各題十句以内)

- ▼丸鬚 前田雀郎選
- ▼居眠り 麻生霞乃選
- ▼錠前 河野春三共選

每 號 募 集

- ▼近作柳樽(廿句迄) 麻生路郎選
- ▼古句質疑(三句迄) 蛭子省二擔當
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件はト記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定 價

普通號 一部 金參拾錢
新特輯號 一部 金五拾錢
八月特輯號 一部 金四拾錢
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

廣 告 料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さい。すば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和三年 四月廿五日印刷

昭和三年 五月一日發行

第五卷第五號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎
大阪府西成區千本通五丁目七番地

發行所 川柳雜誌社
大阪府西成區千本通五丁目七番地
振替大阪三一五一四番

大阪市住吉區杭全町六〇三番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

賣 捌 店

(大阪) 大賣捌 サクラヤ書房 其他市内各書店
(東京) 仲見世 玉森堂(神戶) 米田、後藤(函館) 石塚
(石川縣小松) マット屋(京都) 三宅

川上三太郎編

宮尾しげを畫

菊判半截 定價 九拾錢
上製函入 郵送料 八錢

川柳滑稽句集

新刊

滑稽は人生の潤ひであり長き旅路のオアシスである。然かも川柳は其の滑稽を以て出發したる世界に於ける最短形式の一行詩である。茲に川柳滑稽句集は其の本來の面目たる滑稽の粹の粹を抜き、或は哄笑顫を外すもの、或は皮肉骨を刺すもの、或は苦笑舌を嚙むもの、古今の佳吟秀句集つて三千餘句悉く此の中にある。これやこの人の世、笑ひの手箱……讀む人何時か不景氣を苦にせず、生活苦を超越し、喧嘩を仕損なひ、不平を忘るゝ事、恰も二に二を加へれば合はせて四なり、品川の先はこれ海であるが如し。

同人編

新川柳壹萬句集

四六判 橫綴 函入
定價 壹圓五拾錢
郵送料 拾錢

三面子
岡田朝太郎著

寛政改革と柳樽の改版

四六判 布裝 函入
定價 貳圓五拾錢
郵送料 拾八錢

六〇

磯部甲陽堂

東京日本橋區砲臺町六番地
東京座口舊振番六五〇

發行所

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

川柳漫畫 累卵の遊び

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入

定價 壹圓 (送料拾錢)

大阪市西成區千本通五の七

發行所

不朽洞

振替大阪五二五八五番

實に氣持のいい本だぞ云はれてゐますので
よろこんでゐます。書店で賣切れてゐました
ら直接御注文下さい。御送金になるべく振替
を御利用願ひます。(霞乃)

川柳とは何ぞや——の數萬言を聴くよりも本書を繙け！
實に愉快に、而も不知不識の間に、川柳の妙諦を知悉せん。

内容概目

川柳漫畫 累卵の遊び

日月は輝く

大衆と共に

麻生路郎氏が「川柳雜誌」に連載して非常なる好評を博したる川柳漫畫文集に、更に川柳家諸氏の力作になる佳句名吟を類題により収録したるもの——。
「週刊朝日」特別號に掲載されたる川柳佳吟に選者麻生路郎氏が短評を加へて初心者の參考に資したるもの——。
「講談俱樂部」柳壇の佳什に、その選者麻生路郎氏が短評を附加して一般讀者の興趣を湧かしめたるもの——。

二出版づ

品切に 急御 注文 下さる ために

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから／＼新刊が出るゝ新刊を一々讀破することは容易ではない。たゞへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こゝうなればわざ／＼新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にまつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちに幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやゝであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

(路耶生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

金田晴正著

桃太郎の研究

洋裝美本 全一冊

定價 五十錢 郵税 二錢

日本一の昔話桃太郎に關した著者多年の研究を發表されたものです、如何に我國民性にピッタリ合つて居るかは斯書を見れば直ちに判明します

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

清 酒

滿洲へ積む白鶴の樽の數
白鶴を飲む同朋がなつかしい

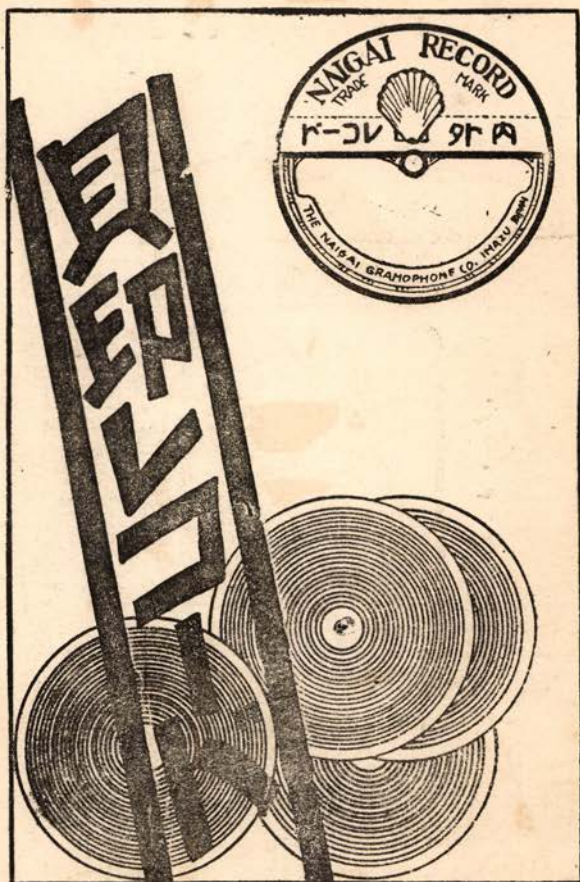
臺所に白鶴据ゐて春を待ち



灘 津 攝

嘉納合名社會釀

つ充福幸はに家るめてつ鳴が器音蓄



會商器音蓄外内 社會資合

町津今線沿神阪

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一圓一日發行）
昭和三年四月二十五日開始本
昭和三年五月一日發行

川柳雜誌

（第五十二號）

定價 參拾錢